

《翻 訳》

ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ
『ナオ船サント・アルベルト号難船記』(1597年)

—ヴィラ・ヴィソーザ, ブラガンサ家所蔵初版本からの全和訳およびテキスト校訂—
(承前)

Tradução integral japonesa do *NAVFRAGIO DA NAO S. ALBERTO, E ITINERARIO DA GENTE, QVE DELLE SE SALVOV* (Lisboa, 1597) da autoria de João Baptista Lavanha

日埜 博司

キーワード

『海難悲話』, ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ, ヌーノ・ヴェーリオ・ペレイラ, カフル人, 銅, ウシ, 物々交換, 野営, アンコセ, ウバブ, ヴィーボ, イニャンクーニャ, マボンボルカツペーロ, イニャンゼ

訳者解題

イスパニア=ポルトガル同君連合時代(1580~1640)のハブスブルク家に主席天文学官(Cosmógrafo-mor)などとして仕えたポルトガル人ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ(João Baptista Lavanha. 以下, ラヴァーニャと呼ぶ)が執筆し1597年にアレシャンドレ・デ・シケイラの工房(リスボア)で印刷された『ナオ船サント・アルベルト号難船記』(以下『ア号難船記』と略称する)の全文和訳を前回(『流通経済大学論集』通巻165号, 2007年)に引き続き掲載する。

今回訳載する記事の範囲は1593年4月1日から5月11日までとする。

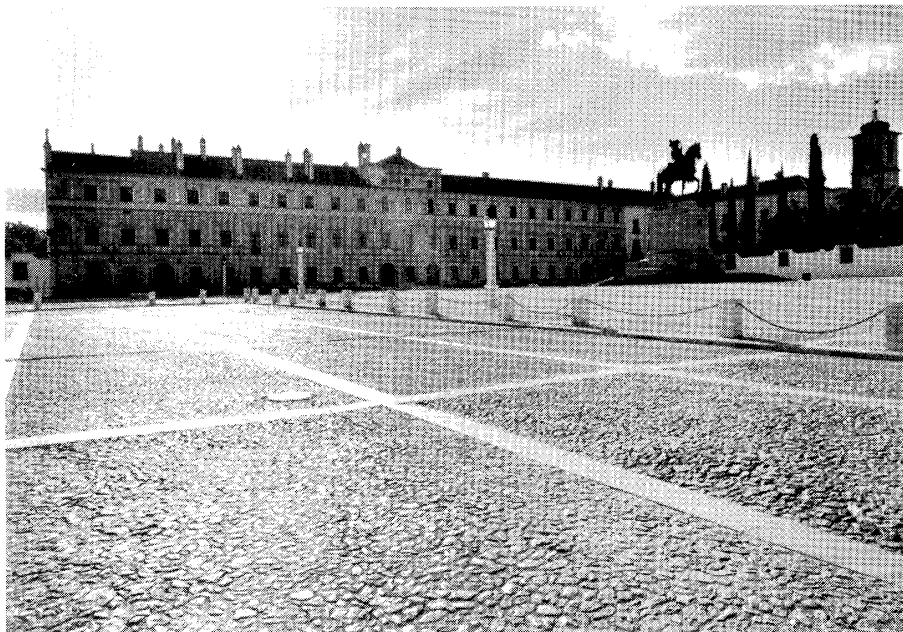


15世紀初頭に開幕する大航海時代, ポルトガル人は隣国カスティーリャと競合しつつ海外雄飛を本格的に開始し, 南北アメリカ大陸のほか, アフリカ, アラビア, インド, 南アジア, 中国, そしてついには彼らにとって東の極限に位置する日本にまでその足跡を延ばした。宣教師を中心とするポルトガル人は, それぞれの“発見”地に關する貴重な地誌・民俗誌を遺し, 独自の法体系・価値基準・道徳観によって律せられる“異”文化が確かに存在することを, 他のヨーロッパ諸国民に先駆けて, 実体験に即しつつ認識するに至った。ポルトガルの歴史家は今もこの時代を^{きょうじ}矜持とともに“Descobrimentos”と呼ぶ。

ポルトガル人書誌学者ベルナルド・ゴメス・デ・ブリット(Bernardo Gomes de Brito. 1688~?)が編纂した『海難悲話』(*História Trágico-Marítima*)には, 16世紀から17世紀にかけてカレイラ・ダ・インディア(Carreira da Índia. 大航海時代リスボアと, インド亜大陸西岸のゴアやコーチンを喜望峰廻りで結んだ, ポルトガル帆船の定期航路)において生じた海難事故とそれに附随して惹起したもろもろの出来事に関する十数種の記録が収められている¹。赫々たる栄光・勝利の

¹ *Historia Tragico-Maritima. Em que se escrevem chronologicamente os Naufragios que tiverão as Naos de Portugal. depois que se poz em exercicio a Navegação da India. Por Bernardo Gomes de Brito. 2 tomos. Lisboa, 1735-36.* 『海難悲話』に関する特筆すべき研究業績として小磯京子がリスボア大学文学部に提出した浩瀚な修士論文を挙げねばならない。この論文は論考

みに彩られていると思われがちなポルトガル大航海時代であるが、『海難悲話』は、そうした肯定的側面を誇らかに謳い上げるというよりは、むしろその影に潜むもろもろの否定的側面を仮借なく暴き出す記事を豊富に含む“antiepopeia dos Descobrimentos”と評すべき一連の著述をもって構成される²。



ヴィラ・ヴィソーザ公爵宮

訳者撮影



『ア号難船記』初版本は世界に2部のみその所在が知られる天下の稀観書である。1部はロンドンのブリティッシュ・ライブラリー(British Library, London)が所蔵するが、もう1部はこれをブラガンサ家(ヴィラ・ヴィソーザ公爵宮 Paço Ducal de Vila Viçosa)が所蔵する。在外研修中の2004年5月某日訳者はここを訪ねた。

ヴィラ・ヴィソーザ(Vila Viçosa)は「緑生い茂る村」を意味するアレンテージョ地方の小都市である(人口およそ1万)。街の中心レブブリカ広場(Praça da República)を抜け、城址が残る小高い丘を右に見ながら直進すると、斜め右前方に、サーモンピンクの色調を帯びた総大理石造りの豪壮な宮殿が見えてくる。ブラガンサ家ゆかりのヴィラ・ヴィソーザ公爵宮である。長大なファサードに面する宮殿広場(Terreiro do Paço)の中央に、イスパニアからの独立回復を宣言しブラガンサ朝ポルトガルの初代王に推戴されたジョアン4世(在位1640~1656)の騎馬像が据えられている。

この宮殿はまた、「ドン・マヌエル2世文庫」(Biblioteca de D. Manuel II)と呼ばれる一大蔵書を擁することでも名高い。

1908年ブラガンサ朝最後の王として即位したマヌエル2世(在位1908~1910)は、1910年10月5日共和制の樹立に伴い一族ともども国外へ逃亡。イングランドを拠点に、赤十字活動に携わるかたわら、比類ない愛書家として、16世紀ポルトガルで印刷刊行された古典籍の体系的蒐集と精力的購入とに心血を注ぐ。そうして形成された

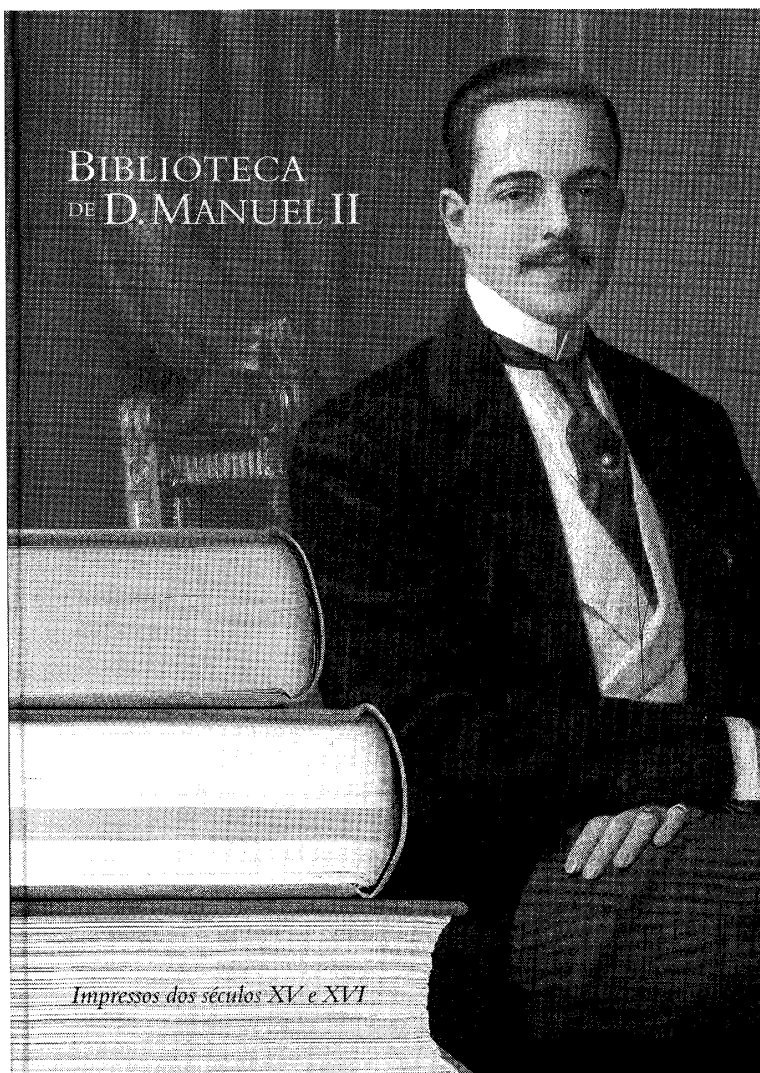
篇・史料篇からなる2巻本としてカスカイス(ポルトガル)で上梓された。Cf. Koiso Kioko (Kyōko), *Mar, Medo e Morte: aspectos psicológicos dos naufragos na História Trágico-Marítima, nos testemunhos inéditos e noutras fontes*, 2 vols., Cascais, Patrimonia, 2004, 705pp.

² *Dicionário de História dos Descobrimentos Portugueses*, ed. Luís de Albuquerque. I, Lisboa, Caminho, 1994, p. 492.

稀有なプライベート・ライブラリーは、ロンドンで刊行されたバイリンガル(英語・ポルトガル語)のカタログ全3巻によりその全貌を把握することができる(『ア号難船記』に関する書誌的考察が見えるのは第3巻³)。図版で示すのは、ドン・マヌエルの肖像画を表紙にデザインした上記カタログの普及版⁴である。

わが『ア号難船記』初版本もこの「ドン・マヌエル2世文庫」に収蔵される一書にはかならない(書架番号 Res.B. D M 2º/ 574)。

『ア号難船記』初版本の扉に印刷されている文言を原著の綴りのまま、またその体裁のまま示せば次のとおりである(『流通経済大学論集』通巻156号76頁図版参照)。



愛書家ドン・マヌエル2世

脚注4に挙げた蔵書目録の表紙

³ *Early Portuguese Books (1489-1600) in the Library of His Majesty the King of Portugal. Described by H. M. King Manuel in three volumes, III (1570-1600) and Supplement (1500-1597)*, London, Maggs Bros, 1935. Facsimile edition: 1995. *Livros Antigos Portugueses (1489-1600) da Bibliotheca de Sua Majestade Fidelissima. Descriptos por S. M. El-Rei D. Manuel em tres volumes, III (1570-1600) e Supplemento (1500-1597)*, Londres, Maggs Bros, 1935. Edição fac-similada: 1995.

⁴ *Biblioteca de D. Manuel II. Impressos dos séculos XV e XVI*, ed. João Ruas, Casa de Massarelos - Caxias / Fundação da Casa de Bragança, 2002.

NAVFRAGIO
DA NAO S. ALBERTO,
E ITINERARIO DA GENTE,
QVE DELLE SE
SALVOV.

De Ioão Baptista Lava-
nha Cosmographo mòr
de Sua Magestade.

DEDICADO AO PRINCEPE
DOM PHILIPPE
NOSSO SENHOR.

EM LISBOA.
Em cása de Alexandre de Siqueira.
ANNO M.D.XCVII.

Com Licença, & Privilegio.

以上の体裁をほぼ真似て和訳すると次のようになる。

ナオ船サント・アルベルト号の難船、
およびその難船から救われた人々の行程

国王陛下〔訳者注——フェリーペ 2 世。ポルトガル国王としてはフィリーペ 1 世〕の主席天文学官
ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ著

我らが君なる親王殿下
ドン・フィリーペ〔訳者注——1598 年にフェリーペ 3 世として即位。ポルトガル国王としてはフィリーペ 2 世〕へ捧ぐ

リスボア
アレシャンドレ・デ・シケイラの工房にて〔印刷す〕
1597 年

〔印刷〕免許状ならびに特許状を附す

フォーマットはオクターヴォ(八折版)。冒頭に、ンブルの打たれない 4 フォリオ(Fólios)がある。その 4 フォリオは下記の内容を含む。〔 〕に入れることにより原著にはそう記述されぬことを示す。

〔Fol.1 recto〕:タイトルページ(扉)

[Fol.1 verso]: 空白

[Fol.2 recto]: フレイ・マノエル・コエーリョらによる免許状 3 通(印刷および出版を許可する証明書。後 2 者はそれぞれ 1596 年 11 月 7 日付けと 1597 年 4 月 17 日付け)

[Fol.2 verso]: フェリーペ 2 世による特許状(1597 年 11 月 28 日付け)

[Fol.3 recto - Fol.4 recto]: フェリーペ親王宛て献辞(1597 年 4 月 19 日付け)

[Fol.4 verso]: 正誤表(*Erratas*)

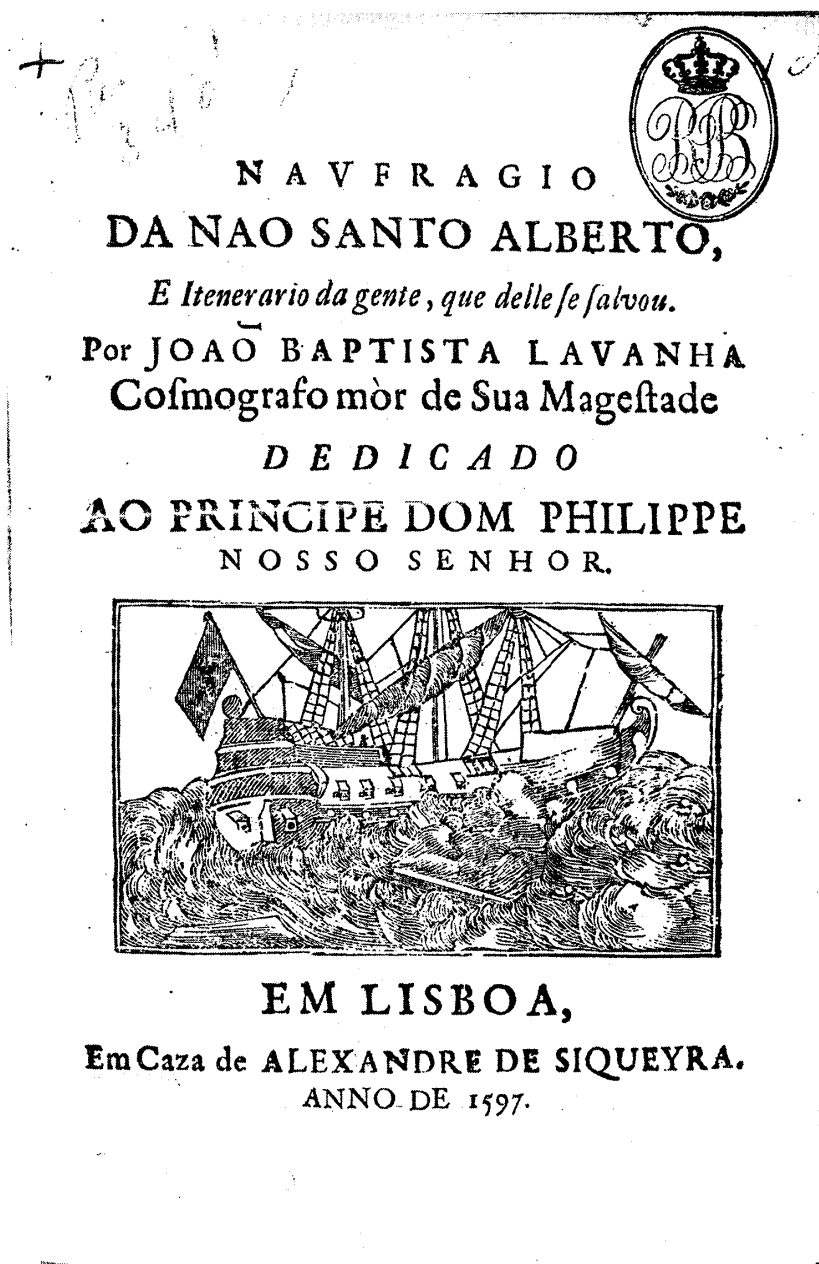
本文の冒頭フォリオ上部右肩に初めて“Fol.1”と記される。“Fólio”である以上、表は“recto”で、裏は“verso”であるのかと思いきや、フォリオの表にも裏にも、アラビア数字でノンブルが印刷してある。結局、『ア号難船記』初版本は、本文に関する限り、フォリオ(fólio)ではなくページ(página)でカウントするほうが適切、もしくは、フォリオでカウントしてもページでカウントしても同じ、ということになる。この解題では便宜上、一貫してフォリオの語を用いるが、上述のとおり、『ア号難船記』本文に関する限り、フォリオとページとは同義であることに留意されたい。最終フォリオは 152 で、1 フォリオの収容行数は 24。本文には全フォリオにキャッチワード(次フォリオ冒頭に来る単語の全部もしくはその一部)が印刷される。落丁・乱丁を防ぐための折り記号は本文テキストが始まることから振られる。折り記号 A から I までは 16 フォリオずつ、J を飛ばして(大文字の J は I で代用されたため)、K は 8 フォリオをそれぞれ含み(丁合い)、それにノンブルが見えない冒頭の 8 フォリオ——タイトルページ[Fol.1 recto]から正誤表[Fol.4 verso]まで——を加えると、総フォリオ(ページ)数は 160 となる。

『ア号難船記』初版本にはその体裁を模倣した“海賊版”——これは書誌学者によって“counterfeit edition”あるいは“contrafacção”と呼ばれる——の存在が複数部知られる。訳者が閲覧したのはリスボア国立図書館(Biblioteca Nacional de Lisboa)が 3 部所蔵するものの 1 部(書架番号 Res.340-I)。これは 18 世紀のものであるということだが、それが 18 世紀に出たものであることの断り書きがどこにも印刷されず、それでいてタイトル・印刷者名・刊行年・刊行地の記載のみならず、本文テキストにおいても初版本の体裁をほぼそのまま引き写しにした書物であるため“海賊版”と称されるのである。しかし 1597 年刊初版本——これを“genuine edition”または“真正版”と仮称する——の扉は文字だけが印刷されるのに対し、18 世紀海賊版には沈みゆくナオ船を描いた木版画が印刷されていること(図版参照)、真正版には掲載されている正誤表(*Erratas*)が海賊版には見えないこと(正誤表を見て手を入れたと推測されるから当然か)、本文に関しては真正版の空欄に日記風の日付が見えるのに対し海賊版にはそれが見えぬこと、前者が octavo(八折版)であるのに対し後者は quarto(四折版)であること、等から、両者の識別は容易である。

前述したとおり、16 世紀真正版は全世界にたった 2 部その所在が知られるにすぎない。それだけに、リスボア国立図書館の貴重書閲覧室(Sala de Leitura de Reservados)で比較的容易に閲覧しうる 18 世紀海賊版(完全にマイクロフィルム化されていることを理由に原物の閲覧は許されなかった)は、たとえそのような呼称を与えられていても、天下の稀観書である『ア号難船記』の全貌を“とりあえず”窺い知るため貴重である、という事実は動かすことができない。さらに、両テキストを微細に比較してみると、海賊版は、真正版をまるまる——無批判的に——引き写しにしたものでは必ずしもないことが判明する。全般に及ぶ綴り字法の時代的差異は別として、海賊版は、真正版において誤りだと思われる箇所へおそらくは適切であろう校訂を施していたり、ごく例外的にはあるが、真正版における中世ポルトガル語の特徴を消すため微妙なテキスト改変を加えていたりするのである。はるか後世に真正版の内容を模倣して上梓したという事実に類かむりしているその一事を措けば、海賊版にも一種“校訂本”としての機能が具わっている、と言わねばならない。

訳者自身、『ア号難船記』和訳の試みは、まず、ベルナルド・ゴメス・デ・ブリット編『海難悲話』所収のテキストにもとづいて着手し、それを前述の 18 世紀“counterfeit edition”によって適宜補正、最終的に——2004 年度在外研修の機会を得たおり——16 世紀“genuine edition”へ初めてアクセスするというステップを踏みつつ、順次

実現することを得た。



『ア号難船記』初版“海賊版”の扉

おそらくは 18 世紀に刊行されたもの。その事実がどこにも記されていないから“海賊版”にほかならないが、真正な初版本の明白な誤記・誤植が適切に補正されていることもあり、一種“校訂本”の機能を具えることも事実である。リスボア国立図書館 (Biblioteca Nacional de Lisboa) 蔵

ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャは、下記のとおり、種々の技能・学藝をもってポルトガル国王セバスティアン(在位 1557~1578)、さらにはハプスブルク家 3 代のフェリーペ王に奉仕し(『ア号難船記』の扉に記されるラヴァーニャの肩書きは「陛下[フェリーペ 2 世]の首席天文学官」Cosmographo mór de Sua Magestade)、いずれの国王からも寵愛され重用されて、不満を申し立てる余地もない、華麗なキャリアを全うするとともに、広範多岐にわたる著述を今日に

遺した。イスパニア=ポルトガル同君連合時代のイベリア文化を代表する多能にして有為の人材であったと評することができる。この頃ポルトガルの知の世界をリードした多くの才能がそうであったように、ラヴァーニャはユダヤの血を引く家庭に生まれた。この点、ペドロ・ヌーネス(航海学・天文学・数学)、フェルナン・ヴァス・ドウラード(地理学)、ガルシーア・ダ・オルタ(本草学)と同様である。



ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャの署名

左: *Nobiliário de D. Pedro* 所載カステロ・ロドリゴ侯爵宛て献辞に見えるもの。1622年5月22日付け(Códice 1450 da Biblioteca Nacional de Madrid)。中央: 1624年3月19日付け遺言書に見えるもの。右: 1624年3月31日付け遺言補足書に見えるもの。Armando Cortesão & Avelino Teixeira da Mota, *Portugaliae Monumenta Cartographica*, IV, Lisboa, Imprensa Nacional - Casa da Moeda, 1987 (Reprodução fac-similada da edição de 1960)より

ラヴァーニャの生涯を簡単に辿ってみる⁵。

彼の正確な生年月日は未詳である。16世紀の半ば、おそらくリスボアで生まれた。両親はクリスタン・ノーヴォ(Christão novo. 新キリスト教徒)と呼ばれるユダヤ教からのカトリック改宗者であった。父はエスクデイロ・フィダルゴ(escudeiro fidalgo)という身分であったルイス・デ・ラヴァーニャ(Luís de Lavanha), 母はジェロニマ・ダッサ(Jerónima Daça)。ドナ・レオナルダ・デ・メスキータ(Dona Leonalda de Mesquita)という婦人と結婚して6人の子を儲けたという。ラヴァーニャには父方の祖父に同名の人物がいる(1555年に死去)。上述のとおり、ラヴァーニャはユダヤ系の家庭に生まれたが、それが判明するのは、後年フェリーペ3世がラヴァーニャをキリスト騎士団に入会させるという恩典を与えるに際し、彼がヘブライ民族の末裔であることを“帳消し”にするため、王みずから命じて教皇の特免(«breve de dispensação»)を申請させた、という事実を確認しうるからである(後述)。

1624年にしたためた遺言書の中で、ラヴァーニャは、セバステイアン王ならびにハプスブルク家3代のフェリーペ王に52年の永きにわたり仕えたと述べている。その主たる資格はそれぞれの「数学師範」(seu mestre de matemáticas)であったという。伝記作者ディオゴ・バルボーザ・マシャードによると、青年ラヴァーニャの才能をまず愛したのは、後年(1578年)モロッコのムスリム勢力と戦ってアルカーセル・キビールの戦場に姿を消すセバステイアン王であった。この王の後押しのもと、ラヴァーニャはローマ遊学の機会を与えられたという⁶。セバステイアン王の宮廷でどのような奉仕に励んだのかについて詳細は不明である。

1580年ポルトガルは隣国イスパニアと同君連合を形成する運びとなった。ラヴァーニャは、フェリーペ2世(在位1556~1598。ポルトガル国王としてはフィリーペ1世。在位1581~1598)から華々しい活躍の舞台を約束される。1582年12月25日付け勅書により、「我らが宮廷において、また、命ぜられるところにおいて、天文学・地理学・地形学

⁵ ラヴァーニャの略伝を記述するに際しては脚注で明示した文献のほか次の書を参照した。António Manuel de Andrade Moniz, *A História Trágico-Marítima: Identidade e Condição Humana*, Lisboa, Edições Colibri, 2001, pp.16-18.

⁶ Diogo Barbosa Machado, *Bibliotheca Lusitana Historica, Critica, e Cronologica*, tomo II, Coimbra, Atlântida Editora, 1966 (Reprodução da edição «Princeps», 1747), p.598. ただし、ラヴァーニャのローマ留学に関するバルボーザ・マシャードの記述に対し、ソウザ・ヴィテルボは根拠に乏しいとして否定的立場をとる(Sousa Viterbo, *Trabalhos Náuticos dos Portugueses [nos] Séculos XVI e XVII*, Reprodução em fac-símile do exemplar com data de 1898 da Biblioteca da Academia das Ciências, ed. José Manuel Garcia, Lisboa, Imprensa Nacional - Casa da Moeda, 1988, pp.[209]-[210])。

の諸事に、かつ数学を講ずることに専念するよう」(«para que se ocupe em nuestra corte y donde se le ordenare en cousas de Cosmografia, Geografia e Topografia, y en leer Matematicas»)命ぜられたのである。翌年フェリーペ 2 世はマドリードにファン・デ・エレラという人物の強い勧めにより科学アカデミーを発足させ、ラヴァーニャは設立されたばかりのアカデミーで数学師範の地位を与えられる。引き続き数年間の史料には「宮廷に常住する数学教授」(«catedratico de matematicas residente en corte»)として活躍するラヴァーニャを確認することができる。ちなみにラヴァーニャは亡くなるまで同職に留まり、後年この分野で彼の教えを受けた弟子の中にはセルバンテスやロペ・デ・ベーガなど錚々たる顔ぶれが見える。

フェリーペ 2 世の 1586 年 11 月 4 日付け勅書により、ラヴァーニャはポルトガル王国のエンジェニエイロ(«emgenheiro do reino de Portugal»)に任命される⁷。これは国内の土木工事全般を司る責任者の地位である。1606 年イスパニア・ポルトガル両国をまたいで流れるドウロ(ドゥエロ)河、エスゲーバ河、ピスエルガ河の水上交通の便宜を高める改修工事に従事したり、1618 年リスボア市当局とともに市内へ上水を引く工事に関与したりしたのは、エンジェニエイロとしての業績である。

フェリーペ 2 世の 1591 年 2 月 12 日付け勅書により、ラヴァーニャは「主席天文学官」(«cosmograffo mor»)の職に就任することが内定する(このとき形式上同職にあったトマス・デ・オルタは病気のため職責を果たし得なくなっていた)⁸。1594 年 6 月 6 日トマス・デ・オルタは世を去る。その結果ラヴァーニャは名実ともに同職に就くことが確認された。その旨フェリーペ 2 世の 1596 年 6 月 6 日付け勅書によって判明する⁹。

1597 年 9 月リスボアのテージョ河には、幾人かの土木技師や水路案内人と一緒に、その河口の測量および調査に従事するラヴァーニャの姿があった。おりからシルト(河口に堆積する沈泥)に対する懸念が深まっていたからである。フェリーペ 2 世はこの問題に対処させるべく、信任するラヴァーニャをリスボアへ赴かせたものと思われる。

フェリーペ 2 世は 1598 年に死去した。ラヴァーニャはその翌年か 1600 年マドリードへ戻る。名実共に「太陽の沈まぬ帝国」を現出していたフェリーペ 2 世の跡を襲うのはフェリーペ 3 世(在位 1598~1621。ポルトガル国王としてはフェリーペ 2 世)である。1601 年フェリーペ 3 世は、ラヴァーニャをフランドルへ遣わす。その狙いは、「イスパニア王国の支配下にある諸領国に関する歴史ならびにイスパニア王国の帝王と王侯の系図[に関する調査]を実行に移すため」(«a poner en efecto la historia de los Estados de la Monarquia de España y la genealogia de los Reyes y Principes della»)であった。その際フェリーペ 3 世は、フランス駐在大使や、フランドルの総督を務めるアルベルト枢機卿に対し、ラヴァーニャを推薦しかつその使命遂行へ協力を惜しまぬよう要請する書状をしたためた。1604 年頃バリャドリッド(フェリーペ 3 世の“気まぐれ”により、マドリードからバリャドリッドへの一時的遷都が実施されたのは 1601 年から 1606 年まで)の宮廷へ復帰。その頃バリャドリッドおよびマドリードの宮廷から発出された文書に現われるラヴァーニャは総じて「陛下の主席天文学官」(cosmógrafo-mor de Sua Magestade)という肩書きである。ちなみに上記のとおり、『ア号難船記』扉に印刷されるラヴァーニャの肩書きもこれである。

1609 年ラヴァーニャはキリスト騎士団(«ordem de Nosso Senhor Jesus Christo»)に入会することを許される(年金 2 万

⁷ Torre do Tombo (Arquivos Nacionais/Torre do Tombo), Chancelaria de D. Filipe 1.º, *Doações*, L.º 17, fol.78. *Apud* Sousa Viterbo, *Trabalhos Náuticos dos Portugueses*, pp.[209]-[210]. この勅書はソウザ・ヴィテルボにより復刻されている。

⁸ Torre do Tombo, Chancelaria de D. Filipe 1.º, *Doações*, L.º 24, fol.76. *Apud* Sousa Viterbo, *Trabalhos Náuticos dos Portugueses*, p.[211]. この勅書はソウザ・ヴィテルボにより復刻されている。

⁹ Torre do Tombo, Chancelaria de D. Filipe 1.º, *Doações*, L.º 31, fol.181v. *Apud* Sousa Viterbo, *Trabalhos Náuticos dos Portugueses*, pp.[211]-[212]. この勅書はソウザ・ヴィテルボにより復刻されている。

レアルの下賜も決定)。このことは、フェリーペ3世の1609年12月11日付け勅書により判明する¹⁰。イスパニアでは、ラヴァーニャのようなユダヤの末裔たちへ種々の制度的差別が加えられるようになっていたが¹¹、それを克服するに与かって力を発揮したのは、やはり、彼に対する王個人の庇護・寵愛であったようである。フェリーペ3世の1607年4月10日付け勅書¹²には、ラヴァーニャがヘブライ民族の末裔であるにもかかわらず(«sem embargo de ser decendente da nação hebraica»), キリスト騎士団に入会する荣誉に浴しうるよう、フェリーペ3世みずから命じて教皇の特免(«o breue de dispensação»)を申請させたこと、それに何より、彼の奉公ぶりが王個人を大いに満足させるものであること(«elle me está aquy seruindo com particular satisfação minha»), 等が述べてある。

1610年10月から翌年4月まで、ラヴァーニャはアラゴンを巡歴して測量に従事、その努力は後年著名なアラゴン図となって実を結ぶ。1615年9月5日にラヴァーニャはアラゴンの閣僚たち¹³に同図が完成したことを報告。初版刊行(1620年)以来、ラヴァーニャ作アラゴン図は地方図の模範として18世紀まで繰り返し印刷される(図版参照)。1616年4月2日同図に対しては正式な印刷允許が与えられた。ところが他にも多くの職務を抱えるラヴァーニャには、印刷(銅板)になかなか取り掛かることができない。閣僚たちはこれにいろいろを募らせる。図版に見るとおり、アラゴン図は彼らアラゴンの閣僚たちへ献呈され、しかも彼ら全員の氏名が列記してある。彼らの懸念は、印刷がずるずると遅延するうちにみずからの任期が満了しアラゴン図に己の氏名が記載されずに終わるのではないか、ということであった。これをめぐってであろう、ラヴァーニャと閣僚たちの間に多少の悶着が起り、前述の行き違いを司法の場に委ね解決を図ろうとする動きが閣僚たちの間に生じた。が、「このポルトガル人[ラヴァーニャ]が権勢いとも大きく陛下[フェリーペ3世]の寵愛厚きこと」(«ser este português tão poderoso e querido de sua Majestade»)を考慮に入れ、彼らは一件を裁きの場へ出すことを思いとどまったという¹⁴。

1612年にはフェリーペ3世の皇太子すなわち将来のフェリーペ4世(在位1621~1665。ポルトガル国王としてはフェリーペ3世。在位1621~1640)の数学師範となる。ラヴァーニャは『宇宙の描写』(*Descripcion del Vniverso*)という書物を執筆する。天文学の要諦を平易に説くテキストであり、6歳になる皇太子宛て献辞の日付は1613年8月20日である¹⁵。

¹⁰ Torre do Tombo, Chancelaria de D. Filippe 2.º, *Doações*, L.º 26, fol.99. *Apud* Sousa Viterbo, *Trabalhos Náuticos dos Portugueses*, pp.[208]-[209]. この勅書はソウザ・ヴィテルボにより復刻されている。

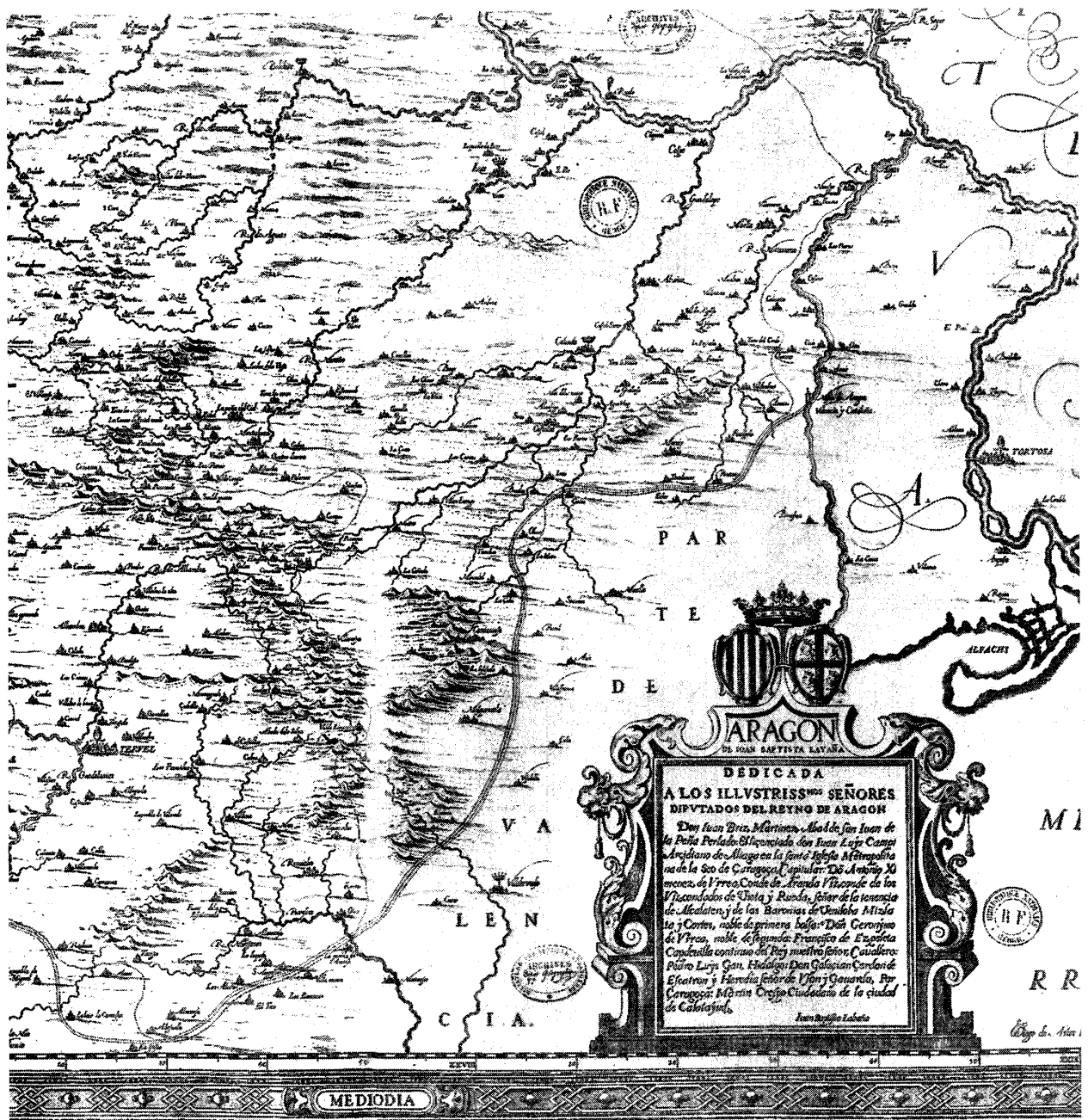
¹¹ 当時のイスパニアには「血の純潔(limpieza de sangre)規約」なるものが存在し、3~4世代を遡ってユダヤ人や、ムスリムなど異教徒の血の混じった“瑕疵”のある家系に連なる者を、官職や教会・修道院、大学の学寮、ギルドや兄弟団などから排除することが規定されていた。この「規約」は、フェリーペ2世、ローマ教皇、トレード大司教が相次いでこれを承認した16世紀半ば以降、徐々に社会各層に浸透してゆく。ただし、この「規約」の対象となったのは、下級貴族までで、有力貴族や国王役人、高位聖職者には基本的に適用されなかった(関哲行『スペインのユダヤ人』山川出版社、世界史リブレット 59, 86~87頁)。位人臣を極めつつあったラヴァーニャにはこの「規約」の影響は及ばなかったのであろう。

¹² Torre do Tombo, *Mesa da Consciencia e Ordens*, Registo de Consultas, 1602-1608, L.º 7, fol.110v. *Apud* Sousa Viterbo, *Trabalhos Náuticos dos Portugueses*, p.[208]. この勅書はソウザ・ヴィテルボにより復刻されている。

¹³ 原語“deputados”にはイスパニア史において定訳がないようであるが、仮に「閣僚」としておく。コルテス(身分制議会)の常設代表者で、アラゴン王国の経済・財政政策に大きな影響力を有した。コルテス閉会中に実施される臨時課税の徴収・管理にも従事した(関哲行氏の教示による)。

¹⁴ *História Trágico-Marítima compilada por Bernardo Gomes de Brito*, ed. António Sérgio, III, Lisboa, Editorial Sul, 1956, p.14.

¹⁵ Armando Cortesão & Avelino Teixeira da Mota, *Portugaliae Monumenta Cartographica*, IV, Lisboa, Imprensa Nacional - Casa da Moeda, 1987 (Reprodução fac-similada da edição de 1960), pp.64; 67.



ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ作『アラゴン図』

献辞にアラゴン王国閣僚たちの全氏名が列記されている。Corteseão & Teixeira da Mota. *Portugaliae Monumenta Cartographica* より

フェリーペ 3 世は 1618 年 3 月 9 日付けの勅書でラヴァーニャをポルトガル王国のクロニスタ・モール («*coronista mor [deste Reyno]*») に指名する。これは年代記作成の総攬者の地位であり、前任者フレイ・ベルナルド・デ・ブリット
の死去により空席であったクロニスタ・モールの地位をラヴァーニャが埋めたわけである¹⁶。引き続き 1618 年 8 月

¹⁶ Torre do Tombo, Chancelaria de D. Filippe 2.º, *Doações*, L.º 42, fol.71v. *Apud Sousa Viterbo, Trabalhos Náuticos dos Portugueses*, pp.[213]-[214]. この勅書はノウザ・ヴィテルボにより復刻されている。フェリーペ 3 世はこの勅書の中で「朕が〔継

10日この職責に対して年俸10万レアルを支給することが決まる¹⁷。

ラヴァーニャ最晩年の榮譽はその子女にも惜しみなく及ぼされた。すなわち1623年、ラヴァーニャのふたりの娘がマドリッドに創設されたばかりのフランシスコ修女会の尼僧院に迎えられたのである¹⁸。ラヴァーニャ父娘がユダヤ系であると感じさせぬ盛大な儀式が挙行された。フェリーペ4世みずから王妃イサベル(・デ・ボルボン)と王家の一族を伴い臨席。オリバーレス伯爵夫人とカステーロ・ロドリゴ侯爵夫人がふたりの代母を務めた¹⁹。前者の夫は伯公爵(コンデ・ドゥケ)の肩書きで知られフェリーペ4世のもとで専横的権力を振るった、そしてベラスケスの描く幾点もの肖像画によって美術ファンには馴染みの深いあのオリバーレスである。

ラヴァーニャの著述のひとつひとつに詳細な解題を施すことは、そのあまりの幅広さゆえ、とうてい訳者の手には負えない。ただ、「専門の枠に閉じ籠もること」が紳士には似つかわしくないと見なされた、そのような時代にあってさえ、ラヴァーニャの果たした役割の多種多様さは特筆に値する、という趣旨のボクサーのコメントを脚注に紹介しておく²⁰。もうひとつアルマンド・コルテザンのコメントにも触れる。コルテザンは1960年に世に出したポルトガル地図学に関する記念碑的大著において、ポルトガルとイスパニアの古文書館をさらに精査するなら、ラヴァーニャに関する史料なり彼の著述なりが新たに発掘される可能性は非常に高いと述べた²¹。そしてその“予言”は的中する。『造船工学に関する第一の書』(*Livro Primeiro da Architectura Naval*)と題するポルトガル語の稿本(おそらくは自筆)が、マドリッド王立歴史アカデミア図書館(Biblioteca de la Real Academia de la Historia, Madrid)で発見されたのである。この稿本はポルトガル海事学会により稿本影印とともに活字化されている。英語訳も附されているので、専門学者による後考が俟たれる²²。

晩年のラヴァーニャは主として歴史学と系図学の著述にいそしみつつ1624年3月31日マドリッドで世を去った²³。旺盛で広範な知的活動を支えるに必要な経費は所定の俸給・年金だけでは賄いきれなかったのであろうか、死後のラヴァーニャには多くの借財が残されていたそうである²⁴。

承せる}領国のもろもろの歴史や古学に関する卓越した知見)(«particular noticia das historias e antiguidades destes meus Reinos»)をラヴァーニャが有すること、さらに、同職を委任しうるのは「才幹ばかりか、史伝的文体を駆使しうる技能を有する人物」(«peso de talento e capaz de estilo historico»)に対してでなければならぬ旨を特記している。

¹⁷ Torre do Tombo, Chancelaria de D. Filippe 2.º, *Doações*, L.º 44, fol.22v. *Apud* Sousa Viterbo, *Trabalhos Náuticos dos Portugueses*, p.[214]. この勅書はソウザ・ヴィテルボにより復刻されている。

¹⁸ ‘His apotheosis (so to speak) came in 1623, when two of his daughters, despite their Jewish blood, were received into the recently founded Franciscan Nunnery at Madrid’ (*The Tragic History of the Sea 1589-1622. Narratives of the shipwrecks of the Portuguese East Indiamen São Thomé (1589), Santo Alberto (1593), São João Baptista (1622), and the journeys of the survivors in South East Africa*, ed. C. R. Boxer, Works issued by the Hakluyt Society, Second Series, No. CXII, 1959 [Kraus Reprint, Millwood, N.Y., 1986], p.43). バルボーザ・マシャードはこの尼僧院の種別には言及していない。

¹⁹ Diogo Barbosa Machado, *Bibliotheca Lusitana*, p.599.

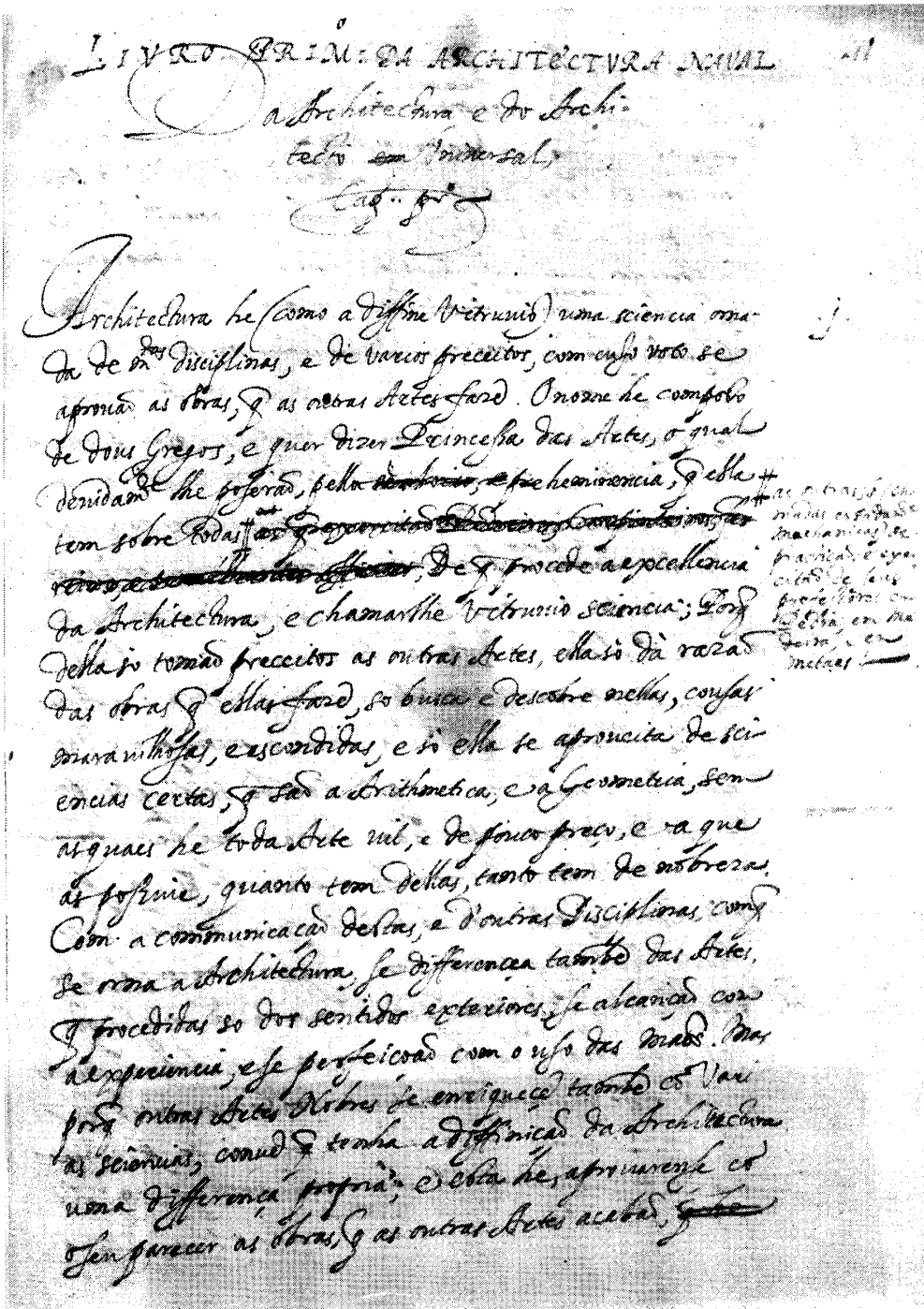
²⁰ ‘Mathematician, engineer, architect, genealogist, and chronicler, he certainly played many parts even in an age when specialization was regarded as unbecoming for a gentleman’ (*The Tragic History of the Sea*, ed. C. R. Boxer, p.43).

²¹ Armando Cortesão & Avelino Teixeira da Mota, *Portugaliae Monumenta Cartographica*, IV, p.63.

²² João Baptista Lavanha, *Livro Primeiro da Architectura Naval*, ed. João da Gama Pimentel Barata et al. Lisboa, Academia de Marinha, 1996.

²³ ラヴァーニャが1625年に亡くなったと記すバルボーザ・マシャードの説(Diogo Barbosa Machado, *Bibliotheca Lusitana*, p.599)は今日否定されている。

²⁴ *Dicionário de História dos Descobrimientos Portugueses*, ed. Luís de Albuquerque et al, II, Lisboa, Caminho, 1994, p.587.



ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ『造船工学に関する第一の書』稿本

João Baptista Lavanha, *Livro Primeiro da Architectura Naval*, ed. João da Gama Pimentel Barata et al, Lisboa, Academia de Marinha, 1996 より



テキスト校訂に際しては原著における用字に極力忠実に従う。中世ポルトガル語の特性から“Infante”や“demonstração”が単純な誤植と速断できぬことなどその典型例であるが、ある用字が明らかな誤植・誤記である

残念ながらこの記事の出典は明らかではない。

かどうかを判断するに際しては慎重な態度を守る。訳者の判断で適宜改行を施すが、その箇所は終わりと始めとに † 記号を附す。



正午南中時の太陽高度から緯度を算出するのに用いる赤緯表について(4月18日の項参照)、帆船史・航海史の専門家杉浦昭典氏(神戸商船大学名誉教授)から今回もまた懇切丁寧なお教えを頂戴した。特記して衷心からの感謝と敬意を捧げる。

前回のあらすじ

1593年1月21日にインドのコーチンを出港、リスボアへ帰航の途に就いたポルトガルのナオ船サント・アルベルト号。造船上の手抜きや整備の不備、さらには船客の貪欲に由来する財貨の過剰な積載が災いし、喜望峰周航を目前に難船する。上陸に際し少なからぬ死者が出るが、生き延びたポルトガル人はヌーノ・ヴェーリオ・ペレイラをカピタン・モールに選出、結束を乱す行動をとらぬという宣誓を行なう。パントゥー系先住民——ポルトガル人はカフル人と呼んだ——との物々交換に際して必要となるであろう鉄・銅その他をナオの残骸から掻き集め、自衛のための武器もできる限り回収して、行進開始の日取りを4月1日と決定する。とりあえずの目的地はポルトガル人の交易地として賑わうロウレンソ・マルケス(現、モザンビーク共和国の首都マプト)である。

翻訳およびテキスト校訂

【4月1日・2日】皆が再び鎮静し、陽の光がさしはじめると、いよいよ前進の第一歩を踏みだした。まずもって、ふたつの丘に挟まるように位置する谷へ足取りも整然と移動した。道案内をすると称する男が数人、そのアンコセであるルスパンセとともにやってきた。彼らはウシ2頭にヒツジ2頭を持参した。手のひらくらいの大きさの銅のかけら3つとこれらを物々交換した。

i. *Abril* [1 de Abril]; ij. [2 de Abril]

† E depois que se aquietarão, & sendo de dia se poserão no principio do caminho, mudãdosse a hũ Valle, que /fol.36/ ficava entre dous Montes, marchando com muito concerto, vierão as Guias cõ o seu Ancosse Luspance, & trouxerão duas Vacas, & dous Carneiros, que por tres pedaços de Cobre do tamanho de hũa mão se resgatarão. †

さてそのウシであるが、これは2頭ともヌーノ・ヴェーリオの命によってエスピナルダ銃で撃ち殺した。これは黒人をびっくりさせ、かつその度肝を抜くことをねらったもので、黒人を前にして、それまでもよくやっていたことだ²⁵。それと同じ効果を得るため、ヌーノ・ヴェーリオは数個ばかりの空の樽に向かってモスケータ銃を発射せしめると、それらの中で弾丸は激しく砕け、大音響を立てた。そのためアンコセは恐怖に充たされ、逃げだしたいような気分になった。しかしヌーノ・ヴェーリオはアンコセの腕を取り、彼を支えてやった。同じことは我らが同胞たちによって他のカフル人にも行なわれた。皆で一緒に食事をとった後、カフル人たちは去ってしまったが、それは、我らが出発を予定している明日また戻ってくるためであった。ただし出発はままならなかった。というのは、この夜、大量の降雨があり、天幕やら衣裳やらを陽に干すことが必要となったからだ。陽射しはたいそう明るかった。

²⁵ このエピソードはアステカ帝国を征服したときにイスパニア遠征隊がとった行動を髣髴とさせる(『失われた文明「インカ・マヤ・アステカ」展カタログ』松本亮三他監修、NHK/NHK プロモーション、2007年、コラム17、杉山三郎「スペイン人による征服」に紹介される絵文書[fig.1]参照。イスパニア軍による銃の威嚇射撃に驚いて失神(?)するアステカ使節団が描かれる)。

† As Vacas por mandado de Nuno Velho se matarão á Espingarda, como se fazia ordinariamente diãte dos Negros pera os espantar, & atemorizar, & pera o mesmo effeito, mandou atirar com os Mosquetes, á algũs quartos vazios, nos quaes fizeram grande destroço, & ruido, de que cheo de medo o Ancosse se quisera acolher, mas Nuno Velho o tomou pello braço, & assegurou, & assi o fizeram os Nossos aos outros Cafres, & depois de comerem todos de companhia, se forão, pera tornarem ao outro dia, em que avia de ser a partida, que não foy, por chover aquella noute muita Agoa, & ser necessario enxugarem as tendas, & vestidos ao Sol, que foy muy claro.

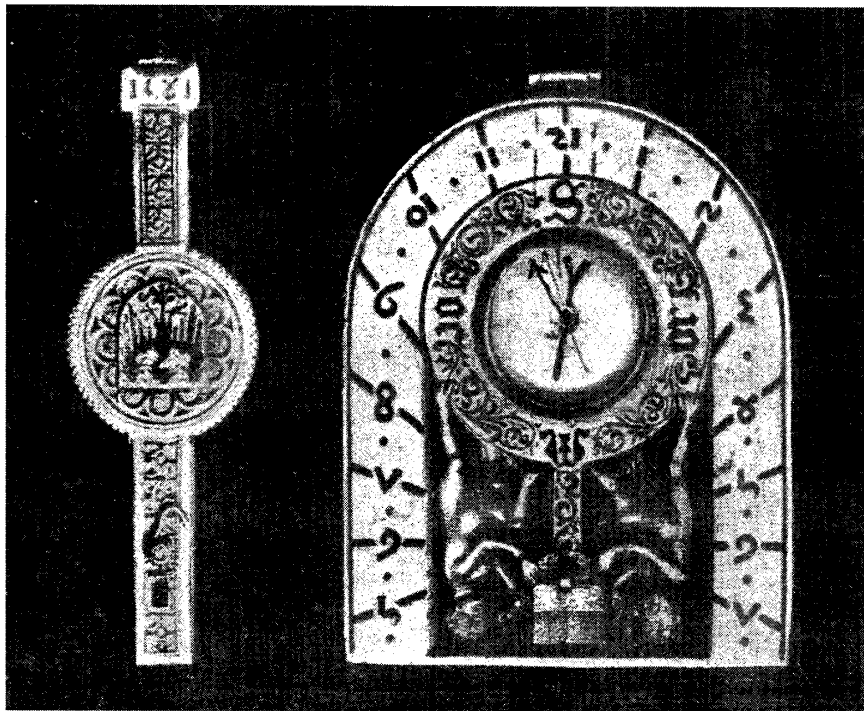
【4月3日】翌日、すなわち4月3日の9時を期して、ポルトガル人たちは浜を出発した。彼らの幾人かはすぐる難船のため負傷しており、とりわけフランシスコ・ヌーネス・マリーニョが片方の脚に負っていた傷はひどかった。黒人の男の子がひとり片方の脚を折っていたのでカフル人たちの世話に委ねられた。この子を癒し面倒を見てやってくれ、という言葉とともに彼らへ銅を渡すと、彼らはその銅と引き換えに、この子を引き取りかつ世話した(表向きは喜んで)。こうして、わが同胞たちが命を保つために^{すが}縫ったナオはその残骸のみ残り、粒々辛苦の末、永い時間をかけて我が物にしてきた財物のかずかずはたった1日で浪の下に失われた。

ijj. [3 de Abril]

Ao seguinte porem que forão tres de /fol.37/ Abril sendo nove horas, partirão daquella praya os Portugueses, algũs delles feridos do destroço passado, entre os quaes o hia muyto em hũa perna Frãisco Nunez Marinho, & cõ outra quebrada ficou hum negro pequeno, encomendado aos Cafres, os quaes, com o cobre que lhes derão pera o curarem, & sustentarem o recolherão, & agasalharão, cõ mostras de boa vôtade. E assi ficarão os pedaços da Nao, em que os Nossos se salvarão, & debaixo das Ondas, as riquezas, que cõ tanta ansia, em muito tempo adquirirão, & em hum só dia perderão. †

前方をガイドのひとりとともに歩んだのは、カピタンとパイロットであった。ヌーノ・ヴェーリョは他のガイドたちを引き連れたが、ここには彼らの王(ルスパンセ)も同行していた。パイロットが日時計を用いてみずからの進行方向を測定したところ、北北東と確認された。行く手は平らな道であり、牧草のたっぶり生えた爽やかな平原を、旅路の始まりゆえ、ゆったりと歩きながら、我らは午後3時にある谷へ着いた。谷間を美しい小川が流れていた。そこで小川はある河に合流していた。そしてその河の淡水が同じ谷の中で海からの水と混ざり合っていた。この場所で大休止を行ないたいとガイドは望んだ。この行進最初の大休止である。我ら一行が一夜を明かしたのは、かたわらに前記の小川が流れ、色とりどりの木々が谷を覆うようにびっしり生い茂るところであった。

† Hia diante o Capitão, & o Piloto com hũa das Guias, & as outras com o seu Rey levava Nuno Velho, & observando o Piloto com hum Relogio Solar, a Derrota da sua estrada, vio que hia ao Nornordeste. Era o caminho chão, & por hũa fresca Varzia chea de feno, pella qual andando de vagar, por ser a primeira jornada chegarão ás tres horas á hum Valle, per que corria hũa fermosa Ribeira, que nelle se /fol.38/ metia em hũ Rio, o qual no mesmo Valle mesturava as suas doces Agoas com as salgadas do Mar. Neste sitio quis a Guia que se fizesse stança, & foy a primeira desta peregrinação, & ao longo da Ribeira, & de espessas Matas, de diversas Cores, que no Valle havia se alojou a nossa Gente.



日時計

1451年製の小型日時計。Reprodução fotográfica do pequeno *Relógio do Sol* de 1451, existente no Museu Fernandem de Insbruck. Apud A. Fontoura da Costa, *A Marinharia dos Descobrimientos*, 3.^a edição, Lisboa, Agência Geral do Ultramar, 1960.

【4月4日】翌日河沿いに——この河はインファンテ河であるが²⁶——対岸へ渡るための浅瀬を探していると、ふたりの黒人に行き逢った。ふたりに対して、我らに付き添っていたルスパンセは次のように頼んだ。我々を案内して君たちのアンコセのもとへ連れていってくれ。もしそうしてくれたら報酬はたっぷりあげよう、と。ふたりは申し出を受けいれ、その意図を伝えるためカピタン・モールへ引き合わされた。カピタン・モールは、ふたりの首にひとつずつ水晶のロザリオを懸けてやった。ふたりは満足そうな様子を見せた。彼らは方向を転じて我らを浅瀬へ案内した。おりからの干潮のため、その浅瀬は膝まで水に浸かる程度で渡ることができた。河にはたくさんのカバやおびただしいカモがいた。一行全員が河の対岸へ渡ると、浜辺からその地点まで付き添ってくれた黒人と、アンコセのルスパンセは我らに別れを告げた。

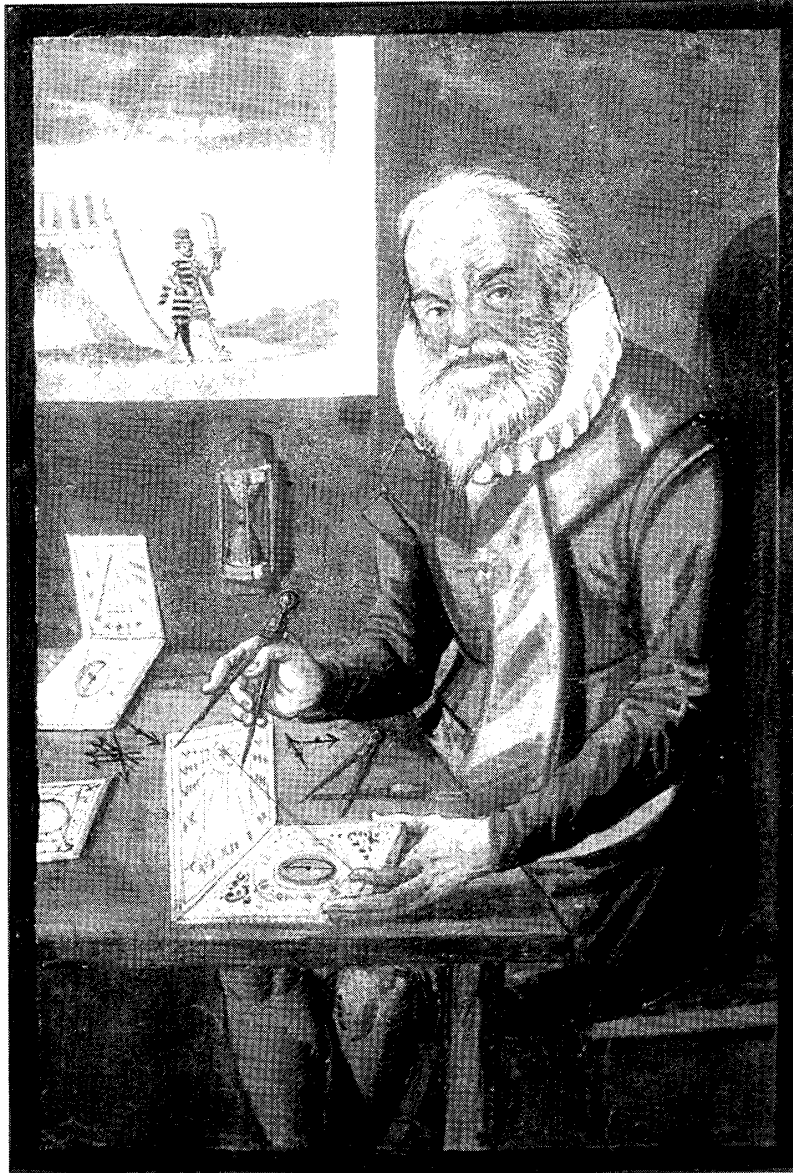
iiij. [4 de Abril]

Buscando ao outro dia ao longo do Rio (que he o do Infante²⁷) vao pera se passar da outra banda, encontrarãose dous Negros, aos quaes Luspance, que vinha com os nossos pedio, que os levassem, & guiassem ao seu Ancosse,

²⁶ インファンテ河(Rio do Infante)は現在のグレート・フィッシュ河(Great Fish River)と同一視されるので、この記述は事実と異なるであろう。ウムタタ河(Umtata River)がこの日すなわち4月4日に一行が渡渉した河であろうと考えられる(*The Tragic History of the Sea*, ed. C. R. Boxer, p.127, note 1)。

²⁷ 海賊版は“Infante”と校訂するが、16世紀ポルトガルの劇作家ジル・ヴィセンテの作品には“Infante”という語形も現われるから、“Infante”を単純な誤植と速断してはならない。“s”や“f”の直前の“n”がときおり脱落する言語現象については、cf. José Joaquim Nunes, *Compêndio de Gramática Histórica Portuguesa (Fonética e Morfologia)*, 8.^a edição, Lisboa, Livraria Clássica Editora, 1975, pp.134-135.

de que ficarião bem pagos. Otorgaramno os dous Negros, & apresentados pera este effeito ao Capitão Mór, elle lhes deitou aos pescoços dous Rosarios de Cristal, com que se ouverão por satisfeitos, & voltarão mostrando aos Nossos o vao, que se passou dâdo a Agoa pello Gíolho, por ser a Maré vazia. Neste Rio havia muitos Cavallos Marinhos, & muitas Adens, & passados todos á outra banda, se despedirão os Negros, & o Ancosse Luspance, que da /fol.39/ Praya tè aquelle lugar vierão. †



日時計職人

ドイツ人画家ハンス・トゥシャーの作品より。「Fabricante de Relógio de Sol」 de Hans Tucher (?-1632), in manuscrito Hausbuch der Mendelschen Zwölfbruderstiftung, Stadt Nürnberg Stadtbibliothek, Nuremberga. Apud António Estácio dos Reis, *Medir Estrelas. Measuring Stars*, Edição do Clube dos Colecionadores, Lisboa, CTT Correios de Portugal, 1997.

そこから先、新たに雇い入れたふたりのガイドに我らはついていった。彼らは河岸に沿って一行を導いたが、頭上はびっしりと樹木に覆われていた。河岸の高みから眼前に開けたのは心地よさそうな草原であり、その両側には稠密に木々の生い茂る丘陵が連なっている。草原はかなり高くて円い形をした山の麓で尽きたのだが、そこ

へ到るまでの勾配が我らをひどく疲れさせた。そこでその草原が果てるあたりで一時休止し、ヌーノ・ヴェーリヨはふたりのガイドへ次のような質問を行なわせた。君らが夜営しようとしている場所はここから遠いのだろうか、と。彼らは返答してそのとおりと言い、今夜中に着くのはとても無理である、と答えたので、ヌーノ・ヴェーリヨは次のように命じた。これ以上先に進むのはやめ、一同ここで夜営を行なう、と。そのことは勾配を下って到達した谷間で行なわれた。その谷には多くの薪があり、おいしい水を湛えた小川が流れていた。

† Do qual por diante seguiráõ os Nossos as duas Guias, que de novo tomarão. Estas os levarão por hũa Cósta acima cuberta de espesso bosque, do alto da qual se deu em hũa aprazível Campina acompanhada, de hũa, & da outra parte de Outeiros cheos de arvoredo, a qual foi parar ao pé de hum alto, & redondo Monte, cuja ladeira cansou muito a os nossos. Pello que parando no cabo della, mandou Nuno Velho saber das Guias, se estava longe o lugar a onde determinavão estanciar, & dando elles por reposta²⁸ que si²⁹, & que não poderião chegar á elle aquella noute ordenou, que não se passando avante, se alojasse a Gente, o que se fez em hum Valle, a que se deceo, no qual havia muita Lenha, & hũa Ribeira de muito boa Agoa. †

この日の旅程もまた、これまでの日々のそれと同様、その方角は一貫して北北東であった。一同の前進の距離はおよそ2レグアに達した。黒人たちが確言するには、これからは常に人家が点在しており、食糧・薪水には困らない、と。我らが夜営すると決めたのを見た黒人たちはこう言いだした。今夜部落へ戻り、明日ウシを数頭連れて戻ってきたい。そうするための許しをカピタン・モールからもらいたい、と。カピタン・モールはその許しを与え、連れてきたウシは好条件で引き取ろう、と約束した。

† Foy sempre a estrada deste dia, como a de outros muitos ao Nornordeste, caminhousse algũas duas Legoa, & por ella affirmavão os Negros, que se acharia sempre povoado, cõ /fol.40/ Mantimentos, Agoa, & Lenha. Os quaes Negros, como viraõ os Nossos alojados pedirão licença ao Capitão Mór, pera hirem aquella Noute á sua Povoação, & trazerem ao outro dia Vacas, & elle lha deu, & prometeo, que serião bem resgatadas.

[4月5日] ふたりのカフル人は約束を守った。彼らは朝方8頭のウシを連れて戻ってきたのである。その見返りとして、彼らへは、銅のかけらを幾つか与えた。その価値は2クルザードほどであったであろう。その日は背の高い牧草がいっぱい茂った、そして多くの小川がゆき交う、緑豊かな平原を前進した。やがて太陽が沈むと、鬱蒼と樹木に覆われた小川のほとりに夜営の天幕を張った。そこで購入済みのウシのうち2頭を屠殺し、それらは旅程のあいだ一貫してそう行なわれたとおり、一同へ平等に分配された。また、この夜営地において我らは、2丁のモスケーテ銃をヌーノ・ヴェーリヨの命に従って土中に埋めた。こんな銃は重くて、厄介物であり、持ち歩く必要性に欠しかったからである。当夜、強い降雨があった。その頃、南の諸地方はほぼ冬の始まりなのだ。かの諸地方における4月は、わが北の諸地方における10月にあたる。当地で、カピタンの奴隷であるインディア人の老女がひとり、これ以上の行路に堪えきれず取り残された。

v. [5 de Abril]

Comprirão os dous Cafres sua palavra, & vierão pella menhaã com oito Vacas, pellas quaes lhe derão pedaços de Cobre, que valerão dous cruzados. Caminhousse aquelle dia por viçosas Varzias cheas de alto Feno, & com muitas Ribeiras retalhadas, & ao Sol posto parou a Arrayal, ao longo de hũa Ribeira de muy espesso arvoredo cuberta, a onde se matarão duas das Vacas, que se havião comprado, as quaes igoalmente se repartirão entre todos.

²⁸ 海賊版には“resposta”とある。初版本で用いられる語形は中世ポルトガル語のもの。

²⁹ 海賊版には“sim”とある。初版本で用いられる語形は中世ポルトガル語のもの。

como sempre se fez em toda a jornada. E neste alojamento enterrarão os Nossos dous Mosquetes, por mandado de Nuno Velho, por serem muy pesados, de grãde embarço, & pouca necessidade. Passousse a noute nelle /fol.41/ com muyta chuva, porque he entãõ, quasi o principio de Inverno naquellas partes do Sul, respõdendo o Mes de Abril nellas ao de Outtubro nestas nossas do Norte, & no mesmo lugar, ficou hũa India velha, escrava do Capitão, não podendo aturar o caminho.

[4月6日] 我らは、ゆうべ来の雨のためびしょ濡れになったので、一夜明けたこの日はわずかしかな前進しなかった。土地は歩きやすく、平坦で、丘が点々とあるだけであった。それらは陰しくもなく、豊かに牧草が茂り、水もたっぷり得られた。ふたりの黒人が述べたところによると、彼らの集落は目と鼻の先であるという。ところが雨が降ってきたため、我らは小川の渡渉を差し控えた。薪がたっぷり調達できる小川のほとりで大休止した。

vj. [6 de Abril]

E porque os Nossos estavam muy molhados, andarão ao outro dia pouco, per muy boa terra chaã, & com poucos outeiros humildes, abundantes de pastos, & Agoas. E posto que o povoado dos Negros era perto, segundo elles dezião, sobreveo a chuva de manera, que não passarão de hũa Ribeira bem povoada de Lenha, & ao longo della ficarão.

[4月7日] 翌日すなわち4月7日の朝、一行全員が食事を済ませた後(この日は終日歩くため食事は早曉に済ませた)、歩きやすい、平坦な道を前進しはじめた。黒人の住む何軒かの家々——一行が伴っていた連中のそれであった——が見えてくると、彼らはわが家の周囲に置いてあるトウモロコシ袋に我らが何か悪さをするのではないかと怖れて道はずれ、道のないところへ誘い入れた。これを見たカピタン・モールはガイドに質問し、なぜ道を逸れるのか、そのわけを知って、一行に停止を命じ、次のようなお触れを發した。なんびともカフル人のものに触れては決してならない。死刑をもってそれを禁ずる、と。彼ら[カフル人]は通訳を介して右の旨を了解し、大いに驚き、かつ苦笑しつつ、道へ戻った。彼らの家々のかたわらにわが同胞たちは宿當した。一行は奴隷のため黒人たちから少量のトウモロコシを買った。黒人のひとりがただちにみずからのアンコセを訪ねるため、我らのもとを去った。アンコセは彼らの家々のそばにいた。

vij. [7 de Abril]

Sendo menhaã do dia seguinte sette de Abril, depois que comeo a Gente toda (o que fazia de madrugada, pera caminhar todo o dia) começou a marchar por bom caminho, & chãõ, & havendo vista de hũas casas de Negros, que erão dos que levavão em sua companhia, elles temendosse, que os Nossos lhe maltrat/fol.42/tassem as suas sementeiras de Milho, que tinhão ao redor dellas, deixarão o caminho, & guiarão por onde o não havia. O que vendo o Capitão Mór, & perguntãdo, & sabendo a causa do desvio, mandou parar o Arrayal, & deitar hum pregão, que sobpena de morte, nenhũa pessoa tocasse em cousa algũa daquelles Cafres, e entendendo elles da lingoa, ficarão espantados, & rindosse, tornarão ao caminho, & ao longo das suas mesmas casas, se aposentarão os Nossos, os quaes comprarão aos Negros, hum pouco de Milho, pera os escravos, & hum delles foy logo a visitar o seu Ancosse, que perto estava daquellas casas.

[4月8日] 我らが、平坦で、太い牧草に豊かに覆われた土地を辿りつつ、王、つまりアンコセの部落に着いたのは、翌日の11時であった。王はすでに我らの来着を知り、一行を道で待っていた。王は4人の黒人をお付きとして従えていた。彼らは我ら白人を見て驚いた様子であったが、我らに同行しているのが黒人であるのを見て安心したようであった。4人の黒人が我らに近づき、彼らの王すなわちアンコセも、カピタン・モールに近づいた。彼

も、別のアンコセであるルспанセがやったのと同じ礼法を行なってみせた。すなわち、カピタン・モールの顎鬚あごひげに手を置き、それが柔らかく、滑らかであることを確かめ、続いて自分の顎鬚がざらざらで、ちりちりであることを確かめると、破顔一笑、カピタン・モールを歓迎してみせたのである。アンコセはヌーノ・ヴェーリョに、アンコセの手下は我らにそれぞれ付き添って、皆は引き続き道中の人となり、集落を後にした。黒人のアンコセは、村から3頭のウシを連れてくるよう命じた。ウシをくれた見返りとして、我らからは銅のかけら9つを差し出した。そして午後4時、薪水が得られるところに野営地を設けた。アンコセが別れを告げて去ってしまうと、同地でウシを3頭とも屠殺した。その肉はいつものことながら平等に皆に分配した。我らがこれまで歩いてきた土地で見出した動物は、カモ、ヤマドリ、ウズラ、ハト、サギ、スズメ、それにカラスである。その野営地で我らとともに歩んできた奴隷が4人——うち3人は黒人、もうひとりマラヴァール人である——取り残された。

viiij. [8 de Abril]

Chegarão os Nossos á Aldea deste Rey ao outro dia ás onze horas, caminhando, por hũa terra chaã, & muy viçosa de grossos pastos, o qual ja os estava esperando no caminho, com quatro Negros em sua companhia, que espantados de verem homens brancos, & assegurados dos Negros, que vinhão com os Nossos, /fol.43/ se chegarão á elles, & o seu Ancosse ao Capitão Mór, que vsando da mesma cerimonia do outro Ancosse Luspance, lhe deitou a mão á Barba, & sentindo³⁰, branda, & corredia, & a sua aspera, & crespas, com grande riso o festejava, & acompanhando a Nuno Velho, & os seus aos Nossos, continuou o caminho, deixando atras a Aldea, da qual o Negro mandou vir tres Vacas, pellas quaes lhe derão nove pedaços pequenos de Cobre, & ás quatro da tarde se fez o Alojamento, onde havia Agoa, & Lenha, & nelle despedido o Ancosse, se matarão tres Vacas, que com a igualdade costumada se repartirão entre os Nossos: Os quaes acharão pella terra que tinhão andado, Adens, Perdizes, Codornizes, Pombas, Garças, Pardaes, & Corvos, & nesta stança ficarão quatro escravos dos Nossos, tres delles Negros, & hum Malavar.

〔4月9日〕翌日すなわち4月9日、少しばかり距離を稼いだところで、ごくわずかな数の家々からなる、柵に囲まれた集落に遭遇した。柵の中にはウシがざっと100頭、さらにオウム種オルムス種の大型のヒツジが120頭くらいいたであろう。集落には、ひとりの年老いた家長が息子や孫たちと生活していた。彼らは大いに驚きつつも、喜んでわが同胞を迎え、大急ぎで用意させたヒョウタン入りの牛乳でもって歓迎してくれた。老人からは、およそ3ヴィンテンの価値があるであろう銅と引き換えに、4頭のウシを買い入れた。さらに旅程を進めてゆくと、道中で5人の黒人に出逢った。彼らの中にガイドを務めているカフル人——この人物へアンコセのルспанセは我らを託したのである——のきょうだい³¹がひとり混じっていた。案内役のカフル人は自分のきょうだいがいると知るや、さっそくこれを探し出し、これをカピタン・モールへ引き合わせた。そうしてきょうだいに対し、自分とカピタン・モールとのあいだにはこれこれの事情があるのだと話した。ヌーノ・ヴェーリョはこの人物を温かく迎え、彼もまたあのいつものながらの礼法でカピタン・モールに挨拶した。この黒人はウバブという名前である。中くらいの背丈であるが、体格はりっぱで、よく均整がとれ、膚はあまり黒くなく、表情は楽しげである。

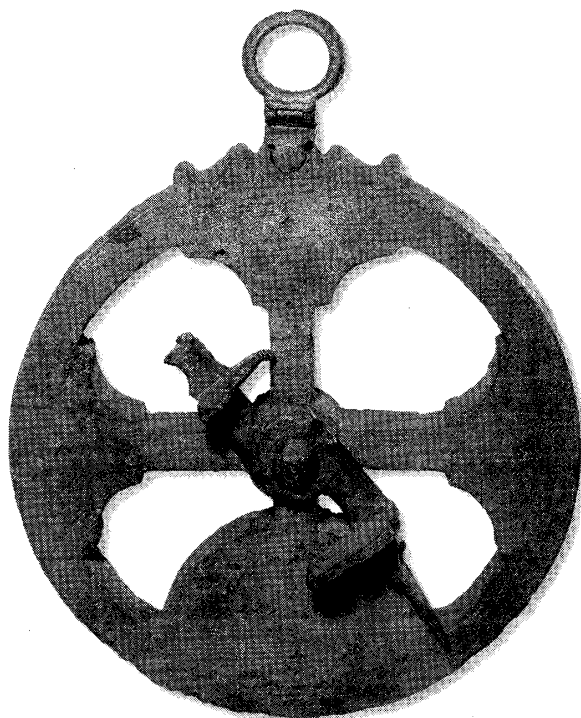
ix. [9 de Abril]

Encontrouse ao outro dia nove de Abril a pouco caminho andado hũa Aldea de poucas casas, cercadas de hum /fol.44/ Curral, no qual haveria cem Vacas, & algũs cento & vinte Carneiros muy grandes da casta de Ormuz, &

³⁰ 海賊版には“sentidoa”と誤記される。

³¹ 多くのヨーロッパ諸語が「兄」と「弟」の区別に無関心であるのと同様、ポルトガル語にも「兄」「弟」を表わす一次名詞は存在しない。一応ここでは「きょうだい」とひらかな表記しておく。

nellas vivia hũ velho Pay, com seus filhos, & netos, os quaes com grande espanto, & alegria receberão os Nossos, & cõ Cabaços de Leite, que a grande pressa ordenharão³². Cõprãoselhes³³ quatro Vacas, por Cobre, que valeria tres vinteins, & continuandosse o caminho, nelle acharão cinco Negros, entre os quaes vinha hũ irmão do Cafre, que era Guia, a quem o proprio Ancosse Luspanse entregou os Nossos. O qual sabendo, que vinha seu irmão, o foi buscar, & o apresentou ao Capitão Mór dizendolhe a razão, que entre ambos avia. Recebeoo Nuno Velho muy humanamente, & elle com a sua costumada cerimonia o festejou. Chamavasse este Negro Vbabú, era de meã statura, bem feito, & proporcionado, não muito preto, & de semblante alegre. †



アストロラービオ(全円儀)

«Sacramento-B」と命名される航海用アストロラービオ。ポルトガル製。17世紀半ば。リスボア海事博物館(Museu de Marinha, Lisboa)蔵。António Estácio dos Reis, *Medir Estrelas* より

正午になったので、ヌーノ・ヴェーリョはパイロットに命じ、難船時に無事であったアストロラービオ〔アストロラーブ。全円儀〕³⁴を用いて太陽の位置を計測させ、現在地、つまりどの緯度にいるのかを調べさせた。パイロットが計測を行った結果、南緯 32 度 06 分という数値を得た。前進しつつあるその方角を違えることなく、一行は 8 日半のうち

³² 海賊版に“ordenarão”とあるのが正しい語形であろう。

³³ 正誤表によって“Cõprãoselhe”とあるのをこのように校訂する。

³⁴ 原綴り“Astrolabio”。アストロラービオは、特に中世のイスラム圏やヨーロッパで盛んに使われた「多機能天文儀器」である。任意の日における天体の出没・南中時刻の予知、任意の時刻における天体の高度・方位角の予知、逆に天体の出没・南中・高度・方位角からの時刻や経緯度の決定、暦の占星術上の事柄の読み取り、建物・山などの高さや距離、井戸の深さの測量など、現代の星座早見盤と土木測量用のトランシット(と時計)を合わせたもの以上の機能を有していた(宮島一彦「星をとらえる道具——アストロラーベ」『週刊朝日百科 世界の歴史 70 船と地図——未知の世界へ』1990年、E-434頁参照)。

に 10 レガアの道のりを稼いだのである。一行の抱える重荷を考慮するなら、その距離は決して短くはなかった。重荷といえば、ドナ・イザベルとその娘ドナ・ルイーザこそそれであった。ブラジルのハンモックのように仕立てた生地に取り、カピタン・モールの奴隷たちがふたりを背中におぶって運んだのだ。こうした布のことをクアマではマシーラと呼ぶ。

† Sendo meyo dia mādou Nuno Velho ao Piloto, que tomasse o Sol com o Astrolabio que salvara /fol.45/ da perdição, & soubesse em que altura estavam. Fez o Piloto a operação, & achou que tinham³⁵ trinta & dous graos, & seis Minutos de Altura do Polo do Sul, pello que cõforme o Rumo, porque caminhavão tinham andado dez Legoas em oito dias & meyo, & segũdo os embaraços, que trazião, não o ouverão por pouco, não sendo o menor D. Isabel, & sua filha D. Luisa, as quaes trazião os escravos do Capitão Mór ás cóstas em Cachas, consertadas ao modo de redes do Brasil, que em Cuama chamão Machilas. †



学問僧の書斎

地球儀や地図のほか、アストロラービオやクワドラント(四分儀あるいは象限儀)といった天体観測器具が見える。A *Bíblia dos Jerónimos*, ed. Martim de Albuquerque & Arnaldo Pinto Cardoso, Lisboa, Bertrand Editora / Milano, FMR, 2004 より

午後 4 時、我らは前出の黒人ウバブが住む一集落に着いた。ウバブは我らが同胞をみずからの家のかたわらに着座させ、満悦の体を大いに見せながら、きわめておとなしい、人に馴れた手持ちの家畜を彼らに見せた。家畜とは 200 頭ばかりのウシであるが、その大半は去勢されていた。去勢されていないウシは、大きさの点で去勢されているウシに勝っていた。もうひとつ家畜の群れがやってきたが、それは大型のヒツジの群れおよそ 200 頭であった。ウバブは一行を迎えた喜びを示そうと、奥方にも出てくるよう命じた。妻の数は 7 人である。3 人の娘と 3 人の息子にも出てくるよう命じた。ウバブは妻たちに言いつけて踊りを踊らせた。彼女らが手を叩き、歌を歌いだすと、

³⁵ 初版本に “tiahão” とあるのは明らかな誤植でありこのように校訂する。

それまでは腰を下ろして我らをじっと見つめていた同じ集落の黒人およそ 60 人も立ち上がり、その歌声に合わせて飛び、跳ね、踊った。ヌーノ・ヴェーリョは、このお祭り騒ぎに満足の意を示し、テゾウレイロに頼んで、絹糸を通した水晶の数珠を彼らに与えるよう指示した。そして子供たちにも水晶の数珠を与えた(旅程においてはそうするのが習わしであったのだ)。さらにまた、チェスの駒 3 個を絹糸でつなぎあわせ、これをウバブの娘たちの首に懸けてやった。そのきょうだいも父(ウバブ)も、これに感謝の意を示し、そのお返しとして、ヌーノ・ヴェーリョへウシ 4 頭を差し出そうと約束した。ヌーノ・ヴェーリョは配下を連れて、集落の近くを流れる小川のほとりで夜営するために去った。そこでは薪に不足はなかった。



“太陽の重さを測る”(Pesando o Sol)

アストロラービオを用いて太陽高度を測定することをこのように表現したらしい。Frontispício do Livro Segundo do *Regimento de Navegación* de Pedro de Medina, 1552. Museo Naval, Madrid. *Apud* António Estácio dos Reis, *Medir Estrelas* より

† As quatro da tarde chegarão á hũa Povoação do Negro Vbabú, o qual fez assentar os Nossos junto a sua casa, & cõ grande demonstração³⁶ de contentamento lhes mostrou o seu Gado muy domestico, & manso, que serião duzentas Vacas as mais dellas Mochas, & as que o não erão excedião ás outras na grandeza. Veo mais hum rebanho de duzentos grandes Carneiros, & pera significar o gosto cõ que os agasalhava, mandou vir suas molhe/fol.46/res, que erão sette, & tres filhas, & algũs filhos. As molheres disse o Negro, que bailassem, & ellas tangendo as palmas, & cãtando, levantarãosse algũs sessenta Negros da mesma Povoação, que assentados estavão vendo os Nossos, & ao mesmo som saltando bailarão. Houvesse Nuno Velho por satisfeito da festa, & pedio ao Tesoureiro, que lhe³⁷ desse continhas de Cristal enfiadas em Seda, as quaes deu aos mininos (o que sempre

³⁶ 脚注 27 で述べたところに従い、初版本に見える“demonstração”は“demôstração”の誤植であるとは必ずしも断言できない。

³⁷ 本来単数形の間接目的格“lhe”は、16世紀ポルトガル語にあつては、単複の区別にさほど神経を使わずに用いられた

costumava nesta jornada) & assi tres trebelhos de Enxedres presos de tres fios de Seda, que deitou aos pescoços das filhas do Vbabú, de que os irmãos, & o pay ficarão muy agradecidos, & em retorno prometerão á Nuno Velho quatro Vacas, o qual com a mais Gente se foy alojar perto da mesma Povoação, ao longo de hũa Ribeira, em que não faltava Lenha.

【4月10日】翌日、それまでひた隠しに隠していた食欲さが、ウバブという黒人にちらちらと見えだした。ウバブは午前中、ずっと我らを欺きだまして足止めを食わせたばかりではなかった。約束した4頭のウシを引き渡して欲しいと頼むと、ウバブは、ウシ4頭引き渡してもよいが、それと引き換えに、ヌーノ・ヴェーリオの持っている大釜が欲しいと言い出した。それは困ると言って大釜を差し出さないでいると、ふてくされたウバブはその場を去り、家族と一緒にわが家のかたわらに座りこんでしまった。この黒人は優しく丸めこむに如くはなしと決意したカピタン・モールは、アルカブース銃の射手15名と通訳たちを伴い、ウバブのもとへ出向いて、優しげな言葉をかけてウバブを連れ出した。そして天幕の中にウバブを招き入れ、菓子とブドウ酒でもてなした。天幕の中であらためてウシの物々交換について協議したが、ウバブの望みは3頭のウシと引き換えに、カピタン・モールが手にしていた真鍮製の蠟燭立てをよこせ、というものであった。この要求にはヌーノ・ヴェーリオもうんざりし、部下に前進を命じ、こう言いたてた。ウバブよ、君のきょうだい(これをイニャンコーザと呼ぶのだが)が施してくれた好意を覚えておればこそ、そして君のきょうだいに恩義を感じておればこそ、私はこうして忪えている。さもなくば君には厳罰で報いたいところだ、と。その黒人つまりイニャンコーザは、野営地から離れたわが家を見に出向いており不在であった。やがて戻ってきた彼が、これまでに起こったことを知ると、きょうだい、つまりウバブのために懸命にとりなし、八方陳弁して、俺のきょうだいはきつと気がふれているのだ、と言った。そして今度はイニャンコーザその人がヌーノ・ヴェーリオをきちんとした道のついでところへ案内しようと申し出た。カフル人の家々に沿って坂道を上りつめると、そのような道に出た。その地点に達すると、イニャンコーザは幼い息子を遣わし、ウシ1頭を曳いてこさせ、午後、それをヌーノ・ヴェーリオへ進呈した。午後、鬱蒼とした木々に囲まれた小川のほとりで一息入れた。そこまで来てイニャンコーザは、もう帰りたい、と言い出した。ただし、翌日必ず戻ってくる、と約束した。ヌーノ・ヴェーリオは、それでは人質として誰か別の黒人を残してゆけ、そうせねばだめだ、と告げた。

x. [10 de Abril]

Enxergousse no Negro ao outro dia a cobiça, que tinha dissimulado, & alem de entreter os Nossos toda a menhã cõ enganos, & fingimentos, quãdo lhe pedirão /fol.47/ as quatro Vacas prometidas, pedio por ellas hum Caldeirão de Nuno Velho, & como arrufado de lho não darem, se foy assentar ao longo da sua casa, com sua familia. Determinou o Capitão Mór levar este Negro com brandura, & assi acompanhado de quinze Arcabuzeiros, & das lingoas, se chegou a onde estava, & com palavras amorosas o trouxe consigo, & na sua tenda o convidou com doce, & vinho. Trattando de novo nella do resgatte das Vacas quiz o Negro, que lhe dessem por tres, hũ Castiçal de Latão, que na mão tinha: de que cansado ja Nuno Velho mandou que marchasse a Gente, afirmando, que castigara á este Cafre, se lhe não lembrara a bondade do irmão (que se chamaua Inhancosa) & a obrigação que lhe tinha. Estava este Negro ausente, que era hido á ver sua casa, apartada do alojamento, & quãdo veyo, & soube o que era passado, intercedeo pello irmão Vbabú, & pera o desculpar dezia, que devia estar doudo, & offereceosse de novo a acõpanhar Nuno Velho /fol.48/ té o por no caminho, que detras de hũa subida se fazia ao longo das suas casas. A

ようである。初版本の“lhe”はここでは意味的に複数であろう。古ポルトガル語の特徴が現代民衆の言葉遣い(a linguagem popular hodierna)に残ることはしばしば観察される言語現象であり、これはその一例か。Cf. José Joaquim Nunes, *Compêndio de Gramática Histórica Portuguesa*, p.239.

onde chegou mandou hum filho seu pequeno buscar hũa Vaca, que lhe apresentou naquella tarde. Nella se agasalhou a Gente junto de hũa Ribeira de espesso arvoredo povoada, donde querendosse hir Inhancosa promettendo que tornaria ao outro dia, o não³⁸ consentio Nuno Velho sem deixar em arrefens outro Negro.

【4月11日】翌日——それは枝の主日であつた——、一行は行進の隊列を変更した。カピタン・モールが先頭へ移つたのは、彼がきわめてゆっくりでしか歩けなかつたからだ。他の連中は彼のペースに合わせざるを得ないであろう。一行はインヤンコーザの代わりに留まつた黒人に案内されたが、やがてある集落のそばを通りかかった。薪水のあるところで天幕を張り終えると、その集落から、このカフル人の呼びかけに応じて、人々がウシ1頭を取引しようとやってきました。我らは、物々交換で得た家畜に対する警戒を常時緩めるわけにはゆかなかつた。野営のさなかにも、家畜は野営地の中央に収容するようにし、しかも終夜、その監視を解くわけにはゆかなかつた。カフル人による盗難を防ぐためである。我らの膚色や衣裳が大いに異なっていることにカフル人は驚いたが、なんとウシまでが我らに対する驚きを隠さなかつた。当地のウシどもときたら、遠くからポルトガル人に向かつて駆けてきて、彼らのそばでびたりと止まるそのとき、決まって鼻づらを空に突き出すのである。まるで見たこともないものに出くわしてぎょつとしたかのように。黒人に対する(それとはなしの)警戒を解くことはできなかつた。それは連中が支払いを受けた後に逃げ散ってしまわぬようにするためであつた。なにしろ何かをくれてやったらさっさと逃げた、というのが彼らの習慣なのだ。

xj.³⁹ [11 de Abril]

Mudousse no seguinte dia, que foy Domingo de Ramos a ordem de caminhar, & passousse á dianteira o Capitão Mór, porque andava pouco, & ao seu passo poderia aturar a mais Gente. A qual guiada do Negro que ficou em lugar de Inhancosa, passou perto de hũa Povoação, & della á chamado do Cafre,⁴⁰ vierão resgattar hũa Vaca, depois de se assentar o Arrayal onde avia Agoa, & Lenha. Levavaõ os Nossos o Gado, que compravaõ entre si cõ goarda, & quando se alojavaõ o recolhiaõ no meyo, & /fol.49/ com cuidado se vigiava de noute, porque o não furtassem os Cafres. Os quaes se estranhavão os Nossos pella diferença da cor, & dos trajos, não menos se espantavão as suas Vacas, porque correndo de longe aos Portugueses, paravão junto delles, com os focinhos no Ar, como maravilhadadas de cousa tão nova. E tinhasse tambem vigia (cõ dissimulação) nos Negros, porque se não fossem depois de pagos, sendo costume seu fogirem como lhes davão algũa cousa.

【4月12日】モスケーテ銃の射手はこれを担ぐことに疲れきっていたし、このようなしろものはもう不要にもなっていたから、ヌーノ・ヴェーリオ・ペレイラならびにカピタンの考えによってこれを前記の小川へ投棄することにした。一同、上のことに賛同して、そのとおりに行なわれた。小川から我らは石の多い一本道を伝って徐々に進んでいった。するとその道に黒人が牛乳を携えて姿を現わした。そしてそれを小さな釘数本と引き換えに譲ってくれた。この日に稼いだ距離はわずかであつた。夜営地の準備を終えると、別のカフル人がやってきました。彼らとのあいだで銅と引き換えに、ウシ3頭を譲り渡すという取引が行なわれたが、その銅の価値はだいたい2トスタンというところであつたろう。彼らからひとりの黒人を差し出して我らに同行させようという申し出があつた。その者に対しヌーノ・ヴェーリオは銀製の塩入れの蓋ふたを与えるよう命じた。

xij. [12 de Abril]

³⁸ 初版本に“nao”とあるのは誤植であり、このように校訂する。

³⁹ 正誤表によって初版本に“vj.”とあるのをこのように校訂する。

⁴⁰ 初版本に“á chamado do, Cafre”とあるのをこのように校訂する。

Cansados os Mosqueteiros dos Mosquetes, & sendo desnecessarios, pareceo bem á Nuno Velho Pereira, & ao Capitão, que se lançassem naquella Ribeira, o que consentindo todos se fez, & della se foy caminhando por hũa estrada pedregosa (á qual sayão Negros com leite, que davão á troco de pequenos pedaços de Pregos) pello que foy a jornada deste dia breve, & alojado o Campo, vierão outros Cafres, que resgatarão tres Vacas por Cobre, que importaria dois tostões. Del/fol.50/les se offereceo hũ a acõpanhar os Nossos, á quem Nuno Velho mandou dar hũa cobertura de hum Saleiro de Prata. †

当地の黒人の衣裳はティゾンベ〔前出〕の黒人のそれと瓜ふたつであるが、異なるのは、彼らが耳に赤い数珠をつけているということだ。ヌーノ・ヴェーリオが、この赤い数珠はどこから来たものか、とカフル人(さきほど塩入れの蓋を与えた例のカフル人である)に尋ねたところ、いろいろなやりとりから、この赤い数珠が、ウニャーカ——すなわちロウレンソ・マルケスの河の一带を根城とする王である——の領地からもたらされていると判った。この数珠は粘土製であり、実に色彩豊かで、大きさはコリアンダーの種くらい、作られたところはインディアのネガパタンであり、そこからモサンビークへ運ばれてくる。モサンビークからはポルトガル人の手を経て当地の黒人たちへ伝えられ、ポルトガル人を相手に行なう象牙との物々交換によって彼らはこの数珠を入手する。

† São os trajos destes Negros como os de Tizombe, & de mais, que elles trazem hũas continhas vermelhas nas orelhas: as quaes perguntando Nuno Velho ao Cafre, (a quem dera a cobertura) donde vinhão, entendeo pellas cõfrontações, que as trazião da terra de Vnhaca, que he o Rey, que povoa o Rio de Lourenço Marquez. São estas contas de Barro, de todas as cores da grandeza de Coentro, & fazense na India, em Negapatão, donde se levão á Moçambique, & dali pellas maõs dos Portugueses se communicão á estes Negros, resgatandoas, no ditto Rio por Marfim.

〔4月13日〕翌日、我らが天幕を撤収しようとしていると、夜當地の近くに住むあるアンコセの倅^{せがれ}がひとりやってきた。倅にはその他の黒人20人が付き従っていた。ヌーノ・ヴェーリオは銀製の鎖を文箱の鍵に通して、これを彼の首に懸けてやった。倅は、とても嬉しそうな表情を見せた。さらに別の品をせしめてやろうと考えて、倅は、ヌーノ・ヴェーリオにこう言った。見たこともない変わった人たちがいるから、見てこい、と父に言われて来てみました。父は、ちょっとばかり道から逸れはするけれど、私の村に立ち寄ってくれたら嬉しい、と言っています。ヌーノ・ヴェーリオはこう答えた。道から逸れるわけにはゆかないな。それよりも、この道のどこかでお父さんとはお目にかかれるのではないかな、と。たったそれだけのやりとりで、アンコセの倅はヌーノ・ヴェーリオに別れを告げた。彼と一緒にやってきた連中もそのようにした。ガイド役の黒人も大いに空とぼけて、もらった例の蓋はちゃっかりと携えたまま、アンコセの倅についていってしまった。

xiiij. [13 de Abril]

Antes que ao outro dia levantassem o Arrayal, veo hum filho de hũ Ancosse que perto do alojamento estava, cõ vinte outros⁴¹ Negros, que o acompanhavão, á quem Nuno Velho deitou ao pescoço hũa chave de hum Escrittorio, com hũa /fol.51/ cadea de Prata. Mostrousse o Cafre muy contente, & pera grangear algũa outra péça lhe disse, que seu Pay o mandava ver aquella Gente, tão estranha, & que folgaria ainda que torcessem algũa cousa do seu caminho, que o fizessem pella sua Povoação. Respõdeolhe Nuno Velho, que não se havia desviar da estrada⁴², & que nella se poderião encontrar, cõ que se despedio este Negro, & os que com elle vierão, & o outro cõ grande

⁴¹ 海賊版には“vinte & oyto”とある。それに従えば「28人の黒人」となるが、初版本の記述を訂する必要があるまい。

⁴² 海賊版では“que não se havia de desviar da estrada”と校訂される。こちらのほうが正しいか。

dissimulação, levãdo porem a cobertoura o seguio. †

我らはこうしてガイドを失ってしまったので、カピタン・モールの命を受け、ピロットがガイド役を務めねばならなかった。ピロットは、この任務を遂行するため、日時計の針の助けを借りたが、とるべき進路はそれまでと同様、北北東方向であった。黒人のガイドに恵まれないときは、常にピロットがガイド役を引き受けた。彼はしばしば病気に罹ったしひどい痛みにもさいなまれていた。にもかかわらず、彼は、(ナオの難船に際して見せた気力に勝るとも劣らぬ)大いなる精神力でこの痛みと闘っていた。みずからに課せられた義務を遂行して仲間を導きたい一念であった。これから導こうとする土地は、彼らにも、また他のいかなるポルトガル人にも実見されたり踏破されたりしたことのない未知の領域である。夜當地のそばにある丘を上ったところで良い道に出た。あたりは人家が多く、黒人が牛乳を携えて道に出てきた。彼らは容量にしておよそ半アルムーデの革袋をひとつくれたが、それはポンプのびょう 鋌3~4本との引き換えであった。

† Ficarão os Nossos sem Guia, pello que foy necessario guiar o Piloto por mandado do Capitão Mór, o que elle fez, cõ hũa Agulha de hum Relogio de Sol, endereitando ao Nornordeste⁴³, como té li fizerão, & sempre que faltou Guia, elle o foy posto que doente muitas vezes, & cõ grãdes dores, ás quaes resistia cõ muito espirito (não mostrando menos animo no Naufragio da Nao) por cõprir cõ esta obrigação, encaminhãdo seus cõpanheiros, por aquellas terras nunca delles, nem de outros nenhũs Portu/fol.52/gueses vistas, & trattadas. E sobindo hũ Monte, que junto do alojamento estava derão em hum bom caminho, & muy povoado, ao qual vinhão os Negros cõ muito Leite, & davão um fole, que teria meyo almude, por tres, & quatro tachas de Bomba. †

黄昏どきに大きな河にぶつかった。ピロットは、手持ちの海図で現在の緯度にあると記載された3つの河のいずれかであろう、と考えた。ただしそれらのうちインファンテ河〔実際はウムタタ河。脚注26参照〕——カバを初めて見たあの河だ——はすでに涉ってしまったはずである。今ぶつかった河は緯度から察して第3の河、すなわちサン・クリストーヴァンと呼ばれる河に違いない。中央の河についていえば、我らは内陸深く分け入ったし、河そのものもあまり大きくはなかったのだから、これに行き逢うことがなかったのであろう。第3の河は水量が多く、流れも激しかったが、数頭の家畜が我らのいるところよりやや上流をわたるのを見て、我らもその地点からわたり渡した。ただし速い流れのため、弱っている者や病気の者が流されてしまいはしないか、という気苦労と恐れがつきまとった⁴⁴。しかしどうにかこうにか、一行は無事対岸へ辿り着き、そのほとりで一夜を明かした。大きな焚き火にあたって体を暖め、渡渉の際に濡れてしまった衣裳を乾かした。

† Ao Sol posto chegarão á hũa grande Ribeira, que pareceo ao Piloto ser hum de tres Rios, que na Carta de Marear estão assinalados, naquella altura, dos quaes ja se avia passado o do Infante, que foy o pimeiro em que se virão os Cavallos Marinhos, & este devia ser o terceiro conforme a altura, chamado de S. Christovão, & o do meyo por hirem metidos pella terra dentro, & não ser muy grande o não encontrarião. Levava este Rio muita Agoa, & corria muy rijamente, & vendo os Nossos, que hum pouco de Gado o passava acima donde estavam, pello mesmo lugar o vadearão postoque cõ trabalho & temor, que a correnteza levasse algum fraco, & doente. Mas todos se acharão da outra banda do /fol.53/ Rio, ao longo do qual estanciarão aquella noute, & á grandes fogos, que fizerão, se aquentarão, & enxugarão a roupa molhada da passajem.

⁴³ 海賊版には“Nordeste”とある。当然初版本に従う。

⁴⁴ 4月13日ヌーノ・ヴェーリョ一行が涉ったのはウムジンヴブ河(Umzimvubu River)であるという。今日はセント・ジョン河(St. John's River. 南緯31度38分附近)と呼ばれる(*The Tragic History of the Sea*, ed. C. R. Boxer, p.135, note 1; note 2)。

【4月14日】翌日、我らはピロットによって指示された進路を辿ったが、道の状態は良く、人が往来した形跡もあった。道沿いには集落が幾つかあり、そこから人々が出てきては、牛乳や我らのスイカによく似た果物を売ろうとした。この果物はカフル人にはマブーレと呼ばれる。11時になり、陽射しはたいそう強く暑くなったので、一同、樹木にさえぎられて影のできている小川のほとりに落ち着き一息入れた。そこへひとりの黒人が配下に堂々と伴われてやってきた。およそ100頭のウシを引き連れていた。この黒人は人品といい、連れてくる従者の豪勢さといい、これまでに行き逢ったいかなるアンコセにもまして身分が高そうに思われた。そのため、ヌーノ・ヴェーリオは天幕からやや離して絨毯を延べるよう命じ、その上で彼を迎えた。当地に慣習的な例の方法で挨拶を交わした後、黒人は、貴殿らポルトガル人とはいったい何者なのか、そしてどこからやってきてどこへゆこうとするのか、知りたいと言った。

xiiiij. [14 de Abril]

Seguindo o outro dia a Derrota, que levava o Piloto, por bom caminho, & seguido, ao longo do qual havia povoações, das quaes sayão a vender Leite, & hũa fruitta semelhante ás nossas Balancias, chamada dos Cafres Mabure, sendo onze horas, & o Sol muy quente, repousarão todos juntos á hũa Ribeira assombrada de Arvoredo. A onde veyo ter hũ Negro, muy acõpanhado de outros, trazendo diante si⁴⁵ algũas cem Vacas, que como mostrasse na pessoa, & acompanhamento, ser de mais qualidade que todos os Ancosses passados, mandou Nuno Velho estender hũa Alcatifa, apartado do Arrayal, em que o recolheo, & saudandosse á maneira costumada da terra, quiz o Negro saber quem erão os Nossos Portugueses, donde vinhão, & pera onde hião. †

ヌーノ・ヴェーリオは答えた。私どもは強大なる全エスパーニャ王の臣下であり、私はここにいる者どもの領袖である。ナオに乗って我らが故国へ向け海(黒人はこれをマンガと呼ぶ)を航行中、難船の憂き目に遭い当地へ打ち寄せられた。我らとしてはウニャーカの土地へ辿り着くため当地を横断したく存ずる。ウニャーカの土地に達したら、我らが出航地へ戻るべく、便船を得ようと思う、と。ヌーノ・ヴェーリオが黒人に対しガイドと食糧の提供を願うと、いずれも差し出してくれた。ガイドは黒人の息子ふたりであり、さらにふたりに付き添うべき黒人2名であった。食糧としてはウシ2頭であった。そのすべてがヌーノ・ヴェーリオには充分なものであったから、アンコセに近づくと、その首に乳鉢の棒を懸けてやった。その重さは4アラテルほどであったであろう。さらに彼には小さな釜ひとつと、水晶製の数珠を進呈した。3人の息子へはそれぞれロザリオを与えた。アンコセは80歳くらいと見受けられた。ヴィーボという名前で、背丈は高く、膚は非常に黒い。2時になると、ヴィーボはキャピタン・モールに別れを告げた。ふたりの息子が我らの案内役としてそのまま留まった。きわめて平坦な土地を進み、日没をしておに行進を停止した。ある部落に接する野原に木々が茂っており、その下で野営した。そこで、ふたりのきょうだい、つまりかのアンコセの息子は暇乞いして去ってしまった。その際、代わりとして、付き添い役であったふたりの黒人を残した。しかしこのふたりも無住の地に足を踏み入れることを怖がり、翌日、別れを告げた。

† Respondeolhe Nuno Velho, /fol.54/ que erão vassallos do poderoso Rey de toda Hespanha, & delles era elle seu Capitão, & que o Mar (a que os Negros chamão Mãga) hindo em hũa Nao pera á sua terra os deitara naquella, a qual cõvinha atravessar, pera chegarem á do Vnhaca, onde acharião embarcação, que os tornassem levar dõde partirão. Pediolhe Nuno Velho Guias, & mâtimentos, hũa cousa, & outra lhe deu este Negro. As Guias forão dous filhos seus, cõ outros dous Negros, que os acõpanhassem, & os mâtimentos duas Vacas. Tudo lhe tinha ja merecido Nuno Velho, porque lhe havia deitado ao pescoço, como chegou, hũa mão de Almofoariz que pesaria quatro

⁴⁵ 海賊版では“diante de si”と校訂される。こちらのほうが正しいか。

Arrateis, & assi apresentou hũ pequeno Caldeirão, & hũas cõtas de Cristal, & á tres filhos seus deu tres Rosarios. Parecia o Negro de lxxx. annos, chamavasse Vibo, era alto de corpo, & muy preto. E sendo duas horas, se despedio do Capitão Mór, ficando os dous seus filhos guiando os Nossos. Os quaes caminhando por hũa terra muy chã, põ/fol.55/dosse o Sol fizerão alto, & alojãrão-se debaixo de hũas Arvores, que em hũ câpo junto de hũa Aldea estavam, donde com licença se forão os dous Irmãos, deixando em seu lugar, os outros dous Negros, que tambem o dia seguinte se despedirão, receando o despovoado.

【4月15日】4月15日の聖木曜日、太陽が上る前に行進を再開した。ゆく手は心地良い平原の広がる、牧草のたっぷり生えた、豊かな土地であった。ふたつの河を横切り、そのうちのひとつのほとりで1時間ばかり小休止した。そしてもうひとつの河のそばで野営した。この野営地でウシ2頭を屠った。そうして得た肉をきちんと皆に分配する一方、残りの2頭は殺さずにとっておいた。黒人たちの言うところでは、これから3日にわたり無住の地を横切ってゆかねばならぬという。その間の前進に備える必要があったためである。

xv. [15 de Abril]

Aos xv. de Abril quinta feira sancta, se começou⁴⁶ caminhar⁴⁷ antes que saísse o Sol, por boa terra, de fermosos câpos, & abũdosos pastos, & atravessarão duas Ribeiras, em hũa das quaes, se detiverão hũa hora, recolherãosse em outra, & nesta stãça matarão duas Vacas, & cõ estreiteza se repartirão, apoupanosse outras duas que ficavão, pera o despovoado, que havião de atravessar, os tres dias seguintes, segũdo dezião os Negros. †

一息入れて落ち着いた後、敬神の念篤い者数人が、ふたつの岩場のあいだに祭壇をこしらえ、そこに十字架像を据え、2本の蠟燭に火をともした。十字架像の前でペドロ修道士は連禱を唱え、それを終えると、時宜に叶った説教を行なった。その説教は涙なしには聴けぬほどであり、どれほど心のこもった説教にあずかっても、これほどに涙を誘われることはあるまいと思われた。

† Depois que aquietarão os Nossos, fizerão algũs devotos hũ Altar entre dous Penedos, em que poserão hũ Crucifixo, cõ duas velas acesas, diante do qual Fr. Pedro disse as Ladainhas, & acabadas fez hum Sermão do tempo, que não foy ouvido com menos lagrimas, que prégado com devação.

【4月16日】ひきつづく3日間、一行は無住の地を行進した。1日目、それは聖金曜日であったが、11時にある沼地に辿り着いた。そこには濁った水がわずかにあるばかりで、陽射しをさえぎるものはほとんどなかった。午後4時、腰まで水に浸かりつつ、流れの速い、幅の広い河を涉った。野営地はその河の対岸に設けた。食べるものは必ずしも多くはなかったため、ある種の根菜を食用に用いた。それはエントレ・ドウロ・イ・ミーニョ地方〔ポルトガル北部、ドウロ河とミーニョ河に挟まれた地方〕にあつてノゼーリヤと呼ばれるものに似ており、たいそう甘くて、形状は小さなカブラのようであり、この道中よく見かけた。

xvj. [16 de Abril]

/fol.56/ Os tres dias seguintes caminharão por desabitado, no primeiro, que foy sexta feira Sancta chegarão ás onze á hum Bregio onde havia pouca Agoa, & turva, & menos sombras: mas ás quatro da tarde se passou hum largo, & corrente Rio dando a Agoa pello Giolho, & da outra banda se fez o alojamento, & como o comer não era muito, aproveitarãosse de hũas raizes, semelhãtes á outras chamadas entre Douro, & Minho, Nozelhas, que erão

⁴⁶ 初版本に“eomeçou”とあるのを正誤表によってこのように校訂する。

⁴⁷ 海賊版では“caminhar”の前に前置詞“a”を置く。こちらのほうが正しいか。

muy doces, & da feição de pequenas Nabiças, as quaes se acharão por este caminho.†

ヌーノ・ヴェーリオ・ペレイラの奴隷たちがドナ・イザベルとドナ・ルイーザを背負うことに疲れきってしまったので、彼はメストレにこう懇願した。水夫を数人説き伏せてこの貴婦人ふたりを運んでやってもらえぬだろうか、と。メストレはピロットの好意に^{すが}縋り、ふたりで、ヌーノ・ヴェーリオから頼まれたことをよくやり遂げた。すなわち見習い水夫16人を動員し、これに1000クルザードの報酬を与えて、ふたりの婦人をロウレンソ・マルケスの河まで運んでもらったのである。ふたりの婦人になりかわり、かつその保証人となって、ヌーノ・ヴェーリオは対価の支払いを約束した。そしてモサンビークで彼女らに代わってそれを支払った。

† E porque os escravos de Nuno Velho Pereira vinhão ja muy cansados de trazerem D. Isabel, & D. Luisa, rogou elle ao Mestre, que acabasse com algũs homens do Mar, quisessem levar estas Fidalgas, ajudosse o Mestre do favor do Piloto, & ambos concluirão bem o que lhes foy encomendado, fazendo com dezaseis Grumetes, que por mil cruzados as levassem té o Rio de Lourenço Marquez, pellos quaes prometteo, & ficou /fol.57/ por fiador Nuno Velho, & por ellas os pagou em Moçambique.

[4月17日] パスコア〔復活祭〕の前日、ひどい朝露のなか、朝早くから丘に上った。太陽が上ってから別別の丘に幾つか上ったが、これが我らに強い消耗ははなはだしかった。なにしろ一行の大半は裸足であったし、かろうじて残っている靴もどうに擦りきれていたから、たった1足の靴に10クルザードという値がついた。こうして上り下りを繰り返しつつ(ただし、一行の辿っている道筋は一貫して同一の方向であった)、一行は鬱蒼とした木々のたもとでシエスタをむさぼった。木々のあいだを縫って小川が流れており、一行はくるぶしまで水に浸かりつつその小川を涉った。

xvij. [17 de Abril]

Vespora de Pascoa com grande orvalhada, se sobio muy cedo hum Outeiro, & depois, que⁴⁸ sayo o Sol, outros, que cansvão muito os Nossos, hindo a mayor parte descalços, sendo ja os Çapatos gastados, & valendo hum par dez cruzados, & assi sobindo, & baixando (caminhando porem sempre por estrada seguida ao memso Rumo) tiverão a sesta á sombra de hum espesso arvoredo, pello qual corria hũa Ribeira, que passarão cõ Agoa pello Artelho. †

小川のほとりで一息入れていると、ひとりの黒人がふたりの妻を連れて姿を見せた。その黒人のもとに通訳が遣わされた。通訳は黒人をヌーノ・ヴェーリオのもとに連れてきた(ただし黒人女は我らから離れたままにしておかれた)。ヌーノ・ヴェーリオは黒人にガイドになってくれるよう頼んだ。そうしてくれたら礼はたっぷりとはずむ、と言い添えた。しかしこのカフル人は荷物、つまりふたりの妻を連れてきていることを口実に、これを断わった。もし独りで来ているのなら、ガイドになってあげるのだが、と。そしてヌーノ・ヴェーリオの差し出した1本の釘にたいそう満足して去ってしまった。我らはしかし満足どころではなかった。あのような無住の地に身を置いていることに改めて心細さを覚えざるを得なかった。結局、日没まで行進を続け、薪水を調達しうる丘の麓に天幕を張った。

† Descansando nella appareceo hum Negro, com duas molheres, ao qual se mandou a lingoa, que o trouxe á Nuno Velho (deixãdo porem as Negras apartadas da Gente) elle lhe pediu, que fosse sua Guia, & lhe pagaria muy bem. Mas o Cafre, se desculpou cõ a carga que trazia, que á vir só fizerao, & com hum Prégo que Nuno Velho lhe deu se foy muy contente. Não o ficarão porem os Nossos vendosse naquelle despovoa/fol.58/do, pello qual

⁴⁸ 初版本にはこのとおり“depois”と“que”のあいだにコンマが打たれるが、不要か。

continuarão seu caminho té o Sol posto, que ao pé de hũ Môte, onde havia Agoa, & Lenha se recolherão.

【4月18日】パスコアの朝、我らは丘に上った。丘を上る途中、一種の根菜を見出したが、それらは葉および味においてニンジンのようにであった。森の中に一種の果物があり、多少酸っぱく、我らのもとにある果実(しかも熟しようの足りないそれ)に似ていた。しかしとにかく、そうしたもののおかげで、我らの食糧に対する不足感はやや遠のいた。ある高台に上って木々の影に入り、暑熱を避けた。正午になったのでピロットは太陽の高度を計測した。赤緯表を用いて計算を行なったところ⁴⁹、現在地は南緯 31 度と判明した。そのことをただちにピロットはヌーノ・ヴェーリョおよび同行の連中に告げた。この新しい知らせは一同を喜ばせた。しかし一同の喜びは長続きしなかった。というのは道中へ戻り、別の丘に上れば、その丘から人家が望めるであろうと期待したにもかかわらず、視界に入ったのは延々と広がる無住の平原のみであったからだ。このため一同の覚えた落胆と悲哀は大きかった。その夜は薪水の便宜があるところに野営した。そこでひとつの決定が下された。翌朝、4人を野営地の南に位置する高地へ、別の4人を野営地の北に位置する別の高地へ、それぞれ派遣することにしたのである。ふたつの高地から人家を確認できぬかどうかを探らせるためである。物見を出しているその合間に、一見したところ、半レグアばかり離れていると思われる谷へ野営地を移すことに決めた。谷にはかなり大きな河の流れがかすかに認められた。そうして流れのほとりで前記8名の物見が帰還するのを待つことにした。

xviiij. [18 de Abril]

Sobirão a manhã de Pascoa o Monte⁵⁰ por elle acharão hũas raizes, que parecião Cenouras na folha, & no sabor, & pello matto hũa fruitta algũ tanto azeda, que semelhava á nossa fruitta nova, cõ que sentirão menos a falta, que tinhão de Mantimentos. Ampararãosse da calma em hũ alto, á sõbra de hũas Arvores, & sendo meyo dia tomou o Piloto o Sol, & feita a cõta cõ a declinação, achou que tinha aquelle sitio 31. Graos de Altura do Polo Austral. Disse logo á Nuno Velho Pereira, & á mais companhia, & á todos alegrou tão boa nova. Mas duroulhes pouco este prazer, porque tornãdo ao caminho, & sobindo outro Môte, esperando descobrir delle povoado, não virão

⁴⁹ 原文“feita a cõta cõ a declinação”. 正午南中時の太陽高度から緯度を算出するのに用いるのが赤緯表であり、紀元前500年頃から存在したとされるが、実用化されたのは15世紀であった(杉浦昭典「沿岸から大洋へ——航海術の発達」『週刊朝日百科 世界の歴史 70 船と地図——未知の世界へ』E-428頁参照)。

図版に掲げる *Códice Bastião Lopes* の赤緯表は太陽の赤緯表であり、太陽が子午線に正中したとき、つまり『ア号難船記』の場合は南半球であるから、太陽が真北にあるとき観測して得た天頂距離にその赤緯を加減して緯度を求めるためのものである。天頂距離とは天頂と太陽の間の角距離で、90度から太陽高度をマイナスして得られる数値。1593年4月18日正午に太陽高度角を観測したピロットのロドリゴ・ミゲイスがどのようにして現在地の緯度を割り出したのか、杉浦昭典氏に上記 *Códice Bastião Lopes* の赤緯表をお示ししてお教を乞うた。素人のため易しく噛み砕いて説明して下さったので、頂戴した書信より引用することを許されたい(御厚意に衷心より感謝と敬意を捧げる)。

「赤緯表の表1で4月18日の項を見ますと赤緯は14度08分です。表2では14度03分、表3では13度58分、また閏年の表4では14度15分となっています。が、分かりやすく14度としましょう。

太陽の高度角を a 、天頂距離を $90^\circ - a$ 、赤緯を d 、緯度を l としますと、

$$l = d + 8(90^\circ - a)$$

となります。緯度が南緯31度だったということですから、

$$31^\circ = 14^\circ + (90^\circ - a)$$

です。したがってピロットは太陽の高度角を73度と観測して緯度を南緯31度と算定したことになります」

⁵⁰ 初版本の表記に従うが、“Monte”の直後にピリオドが必要か。

senão estendidos, & desabitados câpos, que os descôsolou, & entristeceo. Alojaraõ aquella noute, onde havia comodidade de Lenha & Agoa, & resolveosse nella, que na seguinte menhã, se /fol.59/ mandassem quatro homens a hũ alto, que ficava ao Sul da stança, & outros quatro a outro que estava ao Norte, para que delles vissem se se descobria povoado. E em tãto o Arrayal se mudaria a hũ Valle distante donde estava ao parecer meya legoa, no qual se enxergava hũa grande Ribeira de Agoa, & nella esperaria a estes descobridores.

Janeiro			Fevereiro			Março		
Dia	Horas	Minutos	Dia	Horas	Minutos	Dia	Horas	Minutos
1	21	22	1	22	0	1	23	21
2	21	42	2	22	40	2	23	18
3	21	22	3	22	20	3	23	47
4	21	23	4	22	0	4	23	21
5	21	23	5	22	39	5	23	7
6	21	0	6	22	55	6	23	44
7	21	47	7	22	28	7	23	22
8	22	35	8	22	52	8	23	32
9	22	33	9	22	16	9	23	0
10	22	33	10	22	54	10	23	9
11	22	57	11	22	31	11	23	35
12	22	42	12	22	10	12	23	59
13	22	58	13	22	47	13	23	3
14	22	13	14	22	26	14	23	27
15	22	0	15	22	4	15	23	52
16	22	45	16	22	41	16	23	18
17	22	28	17	22	19	17	23	38
18	22	12	18	22	57	18	23	1
19	22	57	19	22	34	19	23	25
20	22	40	20	22	12	20	23	42
21	22	22	21	22	49	21	23	10
22	22	5	22	22	26	22	23	34
23	22	48	23	22	3	23	23	56
24	22	30	24	22	39	24	23	20
25	22	13	25	22	15	25	23	43
26	22	55	26	22	51	26	23	5
27	22	37	27	22	28	27	23	28
28	22	19	28	22	4	28	23	50
29	22	1	29	22	41	29	23	12
30	22	42	30	22	0	30	23	36
31	22	21	31	22	0	31	23	57

Abrill			Mayo			Junho		
Dia	Horas	Minutos	Dia	Horas	Minutos	Dia	Horas	Minutos
1	23	20	1	24	58	1	25	8
2	23	41	2	24	35	2	25	12
3	23	2	3	24	12	3	25	16
4	23	24	4	24	49	4	25	20
5	23	47	5	24	26	5	25	23
6	23	7	6	24	3	6	25	26
7	23	29	7	24	21	7	25	28
8	23	51	8	24	38	8	25	30
9	23	12	9	24	47	9	25	32
10	23	32	10	24	56	10	25	33
11	23	52	11	24	11	11	25	33
12	23	12	12	24	24	12	25	33
13	23	31	13	24	33	13	25	33
14	23	49	14	24	42	14	25	33
15	23	8	15	24	51	15	25	33
16	23	28	16	24	1	16	25	33
17	23	48	17	24	10	17	25	33
18	23	8	18	24	19	18	25	33
19	23	28	19	24	28	19	25	33
20	23	47	20	24	37	20	25	33
21	23	7	21	24	46	21	25	33
22	23	26	22	24	55	22	25	33
23	23	45	23	24	4	23	25	33
24	23	16	24	24	13	24	25	33
25	23	35	25	24	22	25	25	33
26	23	54	26	24	31	26	25	33
27	23	13	27	24	40	27	25	33
28	23	32	28	24	49	28	25	33
29	23	51	29	24	58	29	25	33
30	23	10	30	24	6	30	25	33
31	23	29	31	24	15	31	25	33

Julho			Agosto			Setembro		
Dia	Horas	Minutos	Dia	Horas	Minutos	Dia	Horas	Minutos
1	23	18	1	24	42	1	25	6
2	23	11	2	24	16	2	25	11
3	23	2	3	24	57	3	25	15
4	23	52	4	24	39	4	25	19
5	23	44	5	24	20	5	25	23
6	23	36	6	24	3	6	25	26
7	23	26	7	24	14	7	25	28
8	23	16	8	24	25	8	25	30
9	23	4	9	24	36	9	25	32
10	23	50	10	24	47	10	25	33
11	23	43	11	24	58	11	25	33
12	23	30	12	24	9	12	25	33
13	23	19	13	24	20	13	25	33
14	23	7	14	24	31	14	25	33
15	23	56	15	24	42	15	25	33
16	23	40	16	24	53	16	25	33
17	23	28	17	24	4	17	25	33
18	23	14	18	24	15	18	25	33
19	23	1	19	24	26	19	25	33
20	23	46	20	24	37	20	25	33
21	23	31	21	24	48	21	25	33
22	23	16	22	24	59	22	25	33
23	23	12	23	24	10	23	25	33
24	23	45	24	24	21	24	25	33
25	23	28	25	24	32	25	25	33
26	23	12	26	24	43	26	25	33
27	23	58	27	24	54	27	25	33
28	23	41	28	24	5	28	25	33
29	23	25	29	24	16	29	25	33
30	23	9	30	24	27	30	25	33
31	23	51	31	24	38	31	25	33

Outubro			Novembro			Dezembro		
Dia	Horas	Minutos	Dia	Horas	Minutos	Dia	Horas	Minutos
1	23	53	1	24	28	1	25	6
2	23	17	2	24	45	2	25	11
3	23	41	3	24	3	3	25	15
4	23	2	4	24	16	4	25	19
5	23	47	5	24	28	5	25	23
6	23	24	6	24	41	6	25	26
7	23	47	7	24	54	7	25	28
8	23	8	8	24	7	8	25	30
9	23	52	9	24	19	9	25	32
10	23	14	10	24	32	10	25	33
11	23	36	11	24	45	11	25	33
12	23	58	12	24	58	12	25	33
13	23	10	13	24	11	13	25	33
14	23	41	14	24	24	14	25	33
15	23	12	15	24	37	15	25	33
16	23	74	16	24	50	16	25	33
17	23	45	17	24	3	17	25	33
18	23	2	18	24	16	18	25	33
19	23	26	19	24	29	19	25	33
20	23	46	20	24	42	20	25	33
21	23	6	21	24	55	21	25	33
22	23	26	22	24	8	22	25	33
23	23	45	23	24	21	23	25	33
24	23	15	24	24	34	24	25	33
25	23	34	25	24	47	25	25	33
26	23	54	26	24	10	26	25	33
27	23	14	27	24	23	27	25	33
28	23	33	28	24	36	28	25	33
29	23	52	29	24	49	29	25	33
30	23	11	30	24	12	30	25	33
31	23	30	31	24	25	31	25	33

赤緯表

Códice Bastião Lopes (De Autor Anónimo), ed. Luís de Albuquerque, Lisboa, Imprensa Nacional - Casa da Moeda, 1987より。このCódiceには4種類の赤緯表が掲げられており、表4が閏年用。1592年が閏年なので、ヌーノ・ヴェーリョ一行が東南アフリカを行進した1593年のためには表4から元に戻ってこの表1を適用する

【4月19日】夜が明けると、ゆうべのうちに指名されていた物見8名は南北それぞれの方角へ向けて出発した。太陽が高く昇ると、昨晚打ち合わせておいた場所へ野営地を移した。10時になって南の方角へ行った4人が戻ってきたが、結局集落が見つかったという知らせはもたらされなかった。11時になって別の4人(すなわち、アントニオ・ゴディーニョ、ゴンサーロ・メンデス・デ・ヴァスコンセーロス、シマン・メンデス、それにアントニオ・モニース)が歌いながら戻ってきた。そしてカピタン・モールのもとへ赴き、次のように告げた。遣わされたあの高台からはつきりと見えました。あまり遠くない谷のふところにカフル人がおり、しかもおびただしい家畜が草をはんでいました、と。

xix. [19 de Abril]

Partirão em amanhecendo á hũa, & á outra parte as nomeadas Atalayas, & sendo ja o Sol alto, se foy pór o Arrayal no lugar na noute antes determinado. Aonde vierão ás dez horas os quatro homens, que forão ao Sul sem novas de povoado, & ás onze vierão os outros (que erão Antonio Godinho, Gonçalo Mendez de Vascôcellos, Simão Mendez, & Antonio Moniz) cantando, & chegados ao Capitão Mór disserão, que daquelle alto, onde os mãdara, descobrirão em hũ Valle não muy lóge, gente, & muito Gado pacendo. †

一同全員、待ち望んでいたこの知らせに歓喜した。暑熱の時間帯をやり過ごした後、河上へ向けて渡渉地点を探しつつ行進を再開した。やがてそれが見つかったので膝まで水に浸かりながら対岸へ渡った。ただちにある丘へ登り(その坂道でノウサギを1匹殺した)、3度に分けて休息をとった後、辿り着いた丘のてっぺんから見えたのは、物見が目撃したとおり、人々と家畜の群れであった。家畜どもは、すでに午後遅くなっていたので、三々五々集落のほうへ戻りつつあった。ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラにはそちらへ数名を遣わすのがよいと思われた。そしてメストレと通訳ひとりを見送った。メストレにはアントニオ・ゴディーニョが付き添い、さらに兩名の随行役にはゴンサーロ・メンデス、アントニオ・モンテイロ、それにシマン・メンデスという3人の兵士が当たった。

† Alegrarãosse todos cõ tão desejadas novas, & passadas as horas da calma, se /fol.60/ começou a caminhar pella Ribeira acima buscando Vao, que se achou, & passou da outra banda dando a Agoa pello Giolho: sobiosse logo hum Monte (em cujas fraldas se matou hũa Lebre) descansando tres vezes, & do alto delle se descobrio a Gente, & o Gado, que as quatro Atalayas virão. O qual porque era ja tarde, pouco a pouco se hia recolhendo pera a povoação. Pareceo bem a Nuno Velho Pereira, mandar lá algũs homens, & assi ordenou, que fosse o Mestre cõ Antonio Godinho, & hũa lingoa, acompanhados de tres Soldados, que erão Gonçalo Mendez, Antonio Monteiro, & Simão Mendez. †

ただちに男たちは出発した。一方、本隊に残った人々は、丘の連なりに身を隠しつつ、幾つかの岩塊がそばに迫る谷にじっと身を潜めた。それはカフル人に発見されぬため、そして一行のおびただしさがカフル人に無用の刺激を与えぬようにするためである。メストレとその同行者たちは1レグア半ばかり歩いて夜のとばりが下りた頃、1軒の小屋を目撃した。小屋から少々距離を保ちつつ、通訳は小屋に向かって呼びかけ、小屋に近づくための許しを得ようとした。小屋の中でひとりの黒人が妻子と一緒に火に当たっていたが、彼はただちにその火を消した。呼びかけてきた者が万が一にも敵であった場合、火をめじるしに襲われてはまずいからである。黒人は外に出てきて、誰だ、お前は、と尋ねた。こうした質問を發したのは、黒人には呼びかけた相手が土地の者ではないとわかったからである。言葉ひとつひとつの発音からそのように嗅ぎとったのだ。通訳は答えていわく、逢っても交際してもきつと喜んでもらえる、我らはそういう人間だ、と。しかしカフル人は信用せず、通訳に対し、お前独りで来い、他の連中は今いるところに留まれと言った。そのとおりにした。ふたりの黒人が交渉し、そして宿のあるじが我らの通訳を通じて我ら一行に害意なしと知ると、構わぬ、こちらへ来いと言った。通訳が我らの仲間を呼び寄せると、一

同はカフル人とその妻から温かい歓迎を受けた。そして、牛乳をふるまわれ火を再び熾^{おこ}してもらって一同は篤くもてなされた。メストレが奥方へ水晶のロザリオを進呈すると、彼女はこれに謝意を表わした。そして万事においてわが同胞が黒人と似通った容貌の持ち主であり、ただ変わっているといえば膚の色くらいであるのを目の当たりにし、奥方は驚きを隠すことができなかった。

† Partirão estes homens logo, & o Arrayal, encobrindosse com hũs Outeiros, se foy assentar em hum Valle junto á hũs Penedos, por não ser descuberto dos Cafres, & causarhe espanto a multidão da Gente. O Mestre, & companheiros depois de andarem espaço de Legoa & meya sendo ja noute, virão hũa casa, & della apartados, chamou a lingoa /fol.61/ & pediu licença pera chegar. Hum Negro que estva nella com molher & filhos ao fogo, o apagou, porque não desse com elles se por sorte era seu imigo, o que chamava, & saydo fóra perguntou quem era, porque conhecia não ser natural daquella terra, differenceandoo na pronunciação das palavras. Respondeo a lingoa, que erão hũs homens, que elle folgaria de ver, & tratar. Mas, não se fiãdo o Cafre lhe disse, que fosse elle só, & que os outros ficassem, onde estavão. Assi se fez, & depois que ambos os Negros se tratarão, & o da pousada soube do Nosso, que os companheiros erão pacificos, disse que viessem, chamouos a lingoa, & forão do Cafre, & de sua molher bem recebidos, & cõ Leite, & fogo, que se tornou a accender, agasalhados. Deu o Mestre á Hospeda hum Rosario de Cristal, ella o agradeceo, & ficou maravilhada de ver, que em todo se parecião os Nossos com os Negros, & só na cor se diferenciavão. †

夫の黒人は、我らの仲間に、銅ひとかけらと引き換えに仔ヒツジを1頭譲ってくれた。一行はただちに屠殺し焼き肉にした。我らの仲間がこの仔ヒツジを(心ゆくまで)食べようとしたところへ3人の黒人がやってきた。さらにその後6人がやってきた。彼らは落ち着いていたし、我らの仲間に対しては気にせず食えと告げたけれども、連中にじろじろ見られて食べる午餐の味はさほどではなかった。そうでなければさぞおいしい午餐であったろうが。そうこうして急^せかされるように、また、どぎまぎしながら午餐を済ませると、わが同胞はいったんカフル人に別れを告げた。その際、次のように言い添えた。わが首領のもとへ戻り、君たちに関する知らせを届けてきたい、と。そのことは本隊に戻るやただちに実行された。もはや明け方であった。

† O marido lhes vendeo hum /fol.62/ Cordeiro, por hum pedaço de Cobre, que logo se matou, & pos á assar. E começandoo de comer (pera o que não faltava vôtade) vierão tres Negros, & depois seis, os quaes posto que se assentarão, & assegurarão os Nossos, não lhes soube a Cea tambem⁵¹, como fora gostosa sem elles. E assi apressadamente, & com receo acabada, se despedirão dos Cafres, dizendo que se querião tornar ao seu Capitão, & darlhes nova delles, como fizerão, tanto que chegarão ao Arrayal, que foy na Madrugada seguinte.

【4月20日】この日 暁^{あかつき}の頃、この出来事に皆のあいだから歓声が上がった。集落の存在が確認されたのだから、喜びはひとしおであった。この幸運に乗じようとただちに行進を開始した。道は良好であった。その途中、9時に、ある丘の麓で小休止した。あたりには河に接してカフル人の小屋が3軒あった。さっそくその住人が牛乳を持ってやってきた。いつものように鋏との引き換えでそれを入手した。土地の首領(その名をイニャンクーニャという)は、我らがみずからの土地に来ていると知ると、さっそくカピタン・モールに逢いにやってきた。彼はカピタン・モールから迎えられ、絨毯の上でもてなされた。カピタン・モールが彼に水晶のロザリオ、サンゴ1脚、それにソンプレイロ(日傘)から取った真鍮の取っ手を与えたところ、その黒人ははなはだ満悦し、ヌーノ・ヴェーリョからの求めに応じて、ガイドの提供を約束した。さらにヌーノ・ヴェーリョへウシを1頭進呈した。そのウシは、きのうの午前、

⁵¹ 初版本ではこのように1語であるが、“tão bem”と2語に分解すると、より自然な解釈が得られるようである。

物々交換で手に入れた別の 6 頭とともに屠殺され、2 日分の食糧として皆の間に分配された。午後になって、さらにウシ 10 頭を銅のかげら数個との引き換えで入手した。日が暮れたところで、イニャンクーニャはヌーノ・ヴェーリョに暇乞いをした。そして、丘のてっぺんにある私の部落で明朝あなたをお待ちしよう、と述べた。

xx. [20 de Abril]

Nella se festejou o acontecimento, & muito mais a certeza do povoado, que pera se gozar, se poserão logo todos ao caminho, que era muy bõ, & por elle forão parar ao pee de hum Monte ás nove horas, no qual havia tres casas de Cafres jũto á hum Ribeiro. Vierão logo estes com Leite, que pellas ordinarias tachas resgatarão, & sabendo o senhor da terra, chamado Inhancunha, da chegada dos Nossos á ella, veo visitar o Capitão Mór, & foy /fol.63/ delle recebido, & agasalhado em hũa Alcatifa. Deulhe hũ Rosario de Cristal, hũa perna de Coral, & hũ remate de sombreiro de Sol de Latão, cõ que o Negro ficou em extremo alegre, & prometeo Guias, que Nuno Velho lhe pedio, & apresentoulhe hũa Vaca, a qual cõ outras seis que se resgatarão aquella menã se matarão, & repartirão entre todos, pera dous dias. A tarde se trocarão por pedaços de Cobre, mays dez, & sendo ja o Sol posto, se despedio Inhancunha de Nuno Velho pera o esperar na sua povoação, que no alto do Monte estava.

【4月21日】翌日は前進を中止した。この日をこれまでの労苦からの疲労回復に充てようという配慮である。とはいえ休息ばかりではなく、この日さらにウシ 4 頭、少なからぬ牛乳とウモロコシを物々交換によって手に入れた。我らのまだ立ち去っていないことが隣接の集落に漏れ伝わると、男女を問わず、おびたしい黒人が我らに逢いにやってきた。この連中のもとにわが方の奴隷 10 人が残ることになった。せんだって通過したような無住の地にまたもや足を踏み入れるのを怖れたのである。

xxj. [21 de Abril]

Não se fez jornada o dia seguinte, pera que nelle se refizesse a Gente do trabalho passado,⁵² resgatarãose porem nelle mais quatro Vacas, & muito Leite, & Milho. E como se soube pellas vezinhas povoações, que os Nossos não heraõ hidos, vierão muitos Negros, & Negras á vellos, com os quaes ficaraõ dez escravos, receando outro despovoado como o passado. †

ヌーノ・ヴェーリョは、食糧との交換のため、また、ガイドへの支払いのため、一行に残された銅・鉄・反物を保存しておくことがいかに重要であるか、を思い知った⁵³。さらに、通過する土地土地の王や首領へ差し出すための品々は、これを念入りに管理しておかねばならぬ、と認識した。ヌーノ・ヴェーリョの耳には、一部の者がプロヴェドールとテゾウレイロの命令なしに食糧を物々交換で入手している、との情報が入っていた。そのため黒人から供給してもらった食糧の対価が安定せず、交換のために必要な手持ちの品も減少しつつあった。そこでヌーノ・ヴェーリョは、手もとにある銅・鉄・反物が全部でどれほどあるか、その見積もり表を作らせた。さらに全員に宣誓を求めて、ひとりひとりが所持しているものをはっきり申告するよう、そしてそのすべてを上述の責任者〔プロヴェドールとテゾウレイロ〕へ引き渡すよう義務づけた。これは指摘したような不祥事を防止するためであり、いっさいの分配を平等に行なうためである。さらには、手持ちの品を切り詰めつつ使うことによって、いざ必要ときに必要なものがない、という事態を招かぬようにするためである。

⁵² 初版本はこのとおりであるが、コンマより、コロン(ドイス・ポントス)のほうが正しいと思われる。

⁵³ ラヴァーニャの記録には、ポルトガル人遭難者の一行がゆく先々で銅や鉄を用いた物々交換を行なう様子が頻繁に描かれる。「鉄や銅や塩は生活に欠かせない必需品であるため、広く交易が行われていた」(峯陽『南アフリカ——「虹の国」への歩み』岩波新書、1996年、67頁)。

† E Nuno Velho entendendo quãto importava cõservar o Cobre, Ferro, e Roupa /fol.64/ que ouvesse no Arrayal pera a comutação dos Mantimentos, & paga das Guias & assi ser necessario goardarene algũas péças pera se darem aos Reys, & Senhores das terras perque passavão, & sabendo, que algũs homens resgattavão os dittos Mantimentos, sem ordem do Provedor, & Tesoureiro, com que se alterava o preço delles, & se diminuyão as cousas necessarias pera o resgatte. Mandou fazer orsamento de todo o Cobre, & Ferro, & péças que havia, obrigando todos com juramento que declarassem o que tinhão, & que o entregassem aos dittos officiaes, pera que cessassem os inconvenientes apontados, & com igualdade se distribuisse tudo, & apoupanosse não viesse a faltar quando mais necessario fosse.

【4月22日】翌日の太陽が昇るや、前記の丘に上った。その高みでアンコセのイニャンクーニャはわが同胞を待っていた。イニャンクーニャは、手もとのカフル人からカピタン・モールへ、ガイドとしてふたりを、さらに、一行が連れている14頭のウシへ草を与えたり馴らしたりする係として3名を、それぞれ提供した。丘を下りたときはもう2時であり、続いて平らな土地に出たが、そこは大きな木々に覆われていた。木々は黄色い実をつけていたが、これの大きさはシラウメ〔白梅〕くらい、味はといえば多少の酸っぱさがある。この果実を我らは食べた。たった1本の木から果実をほとんど^も挽いでしまったが、どの木も実をたわわにつけているから、まるでひとつも挽がなかったかと思えるほどであった。こうした木々のあいだを通過し、さらに少し前進すると、休止の刻限となった。牧草のたつぷりと茂った平原で家畜を放し、平原を取り巻いている木々の下で一行は野営した。木々に沿って流れる河から取水できたので、水には困らなかった。

xxij. [22 de Abril]

Sendo ja o Sol saydo do outro dia, se sobio o Monte, no alto agoardava o Ancosse Inhancunha, & dos Cafres que cõsigo tinha, deu ao Capitão Mór dous pera Guias, & tres pera apacentar, & domes/ fol.65/ticar catorze Vacas, que levavão os Nossos. Deceosse o Monte sendo ja duas horas, & derão em hũa terra chaã, cuberta de Arvores grandes, com fruitto amarelo, do tamanho de Ameixas brancas, algum tanto azedo no gosto. Do qual comerão, & levarão todos muito de hũa soo Arvore, & de tal maneira estavão delle carregadas, que pareceo, que se não colhera nenhum. Passado este Arvoredo, & caminhando pouco mais, se fizerão horas de recolher, & em hum Campo abundoso de Feno, se deixou o Gado, & debaixo de Arvores que o cercavão, se agasalhou a Gente, não faltando Agoa de hum Ribeiro, que ao lõgo dellas corria.

【4月23日】翌日、それはすなわち4月23日であったが、一団はここを発って移動した。その際、家畜は前方を歩かせた。少なからぬ村々を通過したが、その住民は、わずかばかりの鋳やら水晶の数珠やらと引き換えに、牛乳やトウモロコシを譲ってくれた。幾つかの丘に上ったが、これが我らを疲労させた。11時、腰まで水に浸かって河を渉り、対岸でシエスタをむさぼった。シエスタを終えると、暑熱は弱まっており、一行は行進を再開した。道は平らではなかったが、人家は多く見られた。それはこの土地がかつて通過してきたどの土地よりも肥沃にして豊饒^{ほうじょう}だからである。黒人はこの土地をオスピダイニャーマと呼ぶ。この森には非常に匂いの強い、ピンクや赤のカーネーションがある。あらゆる点において当地のカーネーションはポルトガルのそれに似ているが、わずかな違いは茎にある。より茎が長いのはわがカーネーションのほうだ⁵⁴。太陽が沈むと、一団はささやかな集落のそばで

⁵⁴ 原文 ‘em tudo semelhantes aos de Portugal, senão nos pés, que os tinhão estes mais longos’. このくだりの解釈は少々微妙である。文中の“estes”（これら）をポルトガルと東南アフリカいずれの視点から捉えるかで意味が逆になるからだ。ラヴァーニャは現地を訪かずイベリア半島で本文を執筆したわけであるから、とりあえず拙訳のようにしておくが、より正確を期すために

休止した。そこで薪水を得たが、水は天からの供給にも恵まれた。夜間、西方の空に雷鳴がはためき、強い降雨があったからである。

xxiiij. [23 de Abril]

Mudousse daqui o outro dia xxiiij. de Abril o Arrayal, levando o Gado diante, passando muitas Aldeas, cujos moradores resgatarão por poucas tachas, & contas de Cristal, Leite, & Milho: sobriãose algũs Outeiros, que cansarão os Nossos, & às onze passado hum Rio dando a Agoa pella coixa, sestearão da outra parte. /fol.66/ Donde sendo a calma menos, tornarão a cõtinuar o caminho, não chãõ, mas muy povoado, por ser a terra muito mais fertil, & grossa, que a passada, chamãohe os Negros Ospidainhama, & em seus Matos ha muy cheirosos Cravos rosados, & vermelhos, em tudo semelhantes aos de Portugal, senão nos pés, que os tinhão estes mais longos. Ao Sol posto se assentou o Arrayal junto de hũa pequena Povoação, a onde tiverão Lenha, & Agoa, que não faltou tambem do Ceo, porque ouve de noute hũa trovoadã rija do Oeste com muita chuva.

[4月24日] この夜當地に相対して高い丘がひとつあった。翌早暁、この丘へ上った。そこから人家の密集する平地へ下り、その平地を11時まで前進した。やがて岩場のあいだを流れる河にぶつかった。岩場のあいだには洞穴があったので、その中に入って我らは暑熱をやり過ごした。そこへ村々からおびたしい黒人が、妻子同伴で、一行を見にやってきた。そして踊りや歌でもって一行を楽しませた。彼らは、ほとんどすべて浅黒い膚色であり⁵⁵、身ぶり手ぶりが豊かで、気分がよさそうだ。その衣裳は、ティゾンベの他のカフル人が纏うそれと同じである。ただ、顎鬚あごひげに手を置いて挨拶するという例の風習は、ティゾンベのカフル人におけるほど一般的ではない。わずかばかりの鋏と引き換えに、彼らは持参した大量の牛乳と、トウモロコシの菓子をくれた。この菓子を彼らはシンコアと呼ぶ。陽が西に傾いた頃、我らはこの河を発った。前記の平地を行進しつづけ、別の河に辿り着いたので、その晩は、ウシ22頭とともにそのかたわらで夜営した。頭上を覆うのは実のない大きな木々であった。

xxiiiij. [24 de Abril]

Defrõte deste Alojamento estava hum Mõte alto, que se sobio ma seguinte madrugada, & delle se desceo á hũ campo cheo de Povoações, pello qual se caminhou té às onze que se chegou á hũa Ribeira, que entre pédras corria, & dellas havia lapas á cuja sombra passarão os Nossos a calma. Aly os vierão ver das Aldeas muitos Negros cõ Molheres, & Mininos, & cõ o seu bailar & cantar os festejavão. /fol.67/ Erão quasi todos Fulos, bem agestados, & dispostos, o trajõ o mesmo, que o dos outros Cafres de Tizombe, não vsaõ tanto de por a mão na Barba como elles, & a troco de muy poucas tachas, derão muito Leite, & Bolos de Milho, que trazião, chamados delles Sincoá. Declinando o Sol, se partirão desta Ribeira os Nossos, & marchando pello mesmo Campo, chegarão á outra, junto da qual se recolherão aquella noute debaixo de grãdes Arvores sem fruto, com xxij. Vacas.

[4月25日] 翌日、一行はこの河を発ち、続いて山を登りはじめた。この道程で初めてぶつかった山らしい山であった。9時に頂に着いたが、そこに部落がひとつあった。山の頂を下りると平地に出た。平地に出た後、少なからぬ家々のあいだを縫いながら行進を続け、やがてかなり大きな河にぶつかった。河にはカバがたくさんいた。

は植物学的な考察を加える必要があるであろう。

⁵⁵ 原語“Fulos”。アントニオ・セルジオはこれを種族の名称かと推定しているが、ここではネーヴェス・アグアスの考証に従う。それによるとこの語彙はここでは形容詞であり、その意味は“pardos”(褐色)とか“de pele azeitonada”(オリーブ色)である(Bernardo G. de Brito, *História Trágico-Marítima*, II, ed. Neves Águas, [Lisboa], Publicações Europa-América, p.143, nota 22)。

この河は黒人の確言するところによると、一団が今朝、そこを発ったあの河と同じであるという。たびたび蛇行を繰り返しながら、この土地をぐるりと取り巻いているのだ。我らはこの河のかたわらで野営した。黒人との物々交換によってウシ6頭を手に入れた。差し出したのは、大きな錐きりひとつと、銅のかげら数個であったが、その重さは1アラテルというところであったろう。

xxv. [25 de Abril]

Partirão desta Ribeira ao outro dia, & começarão sobir hũa Montanha, que foy a primeira desta jornada, á cujo alto chegarão ás 9. horas, onde estava hũa Povoação, & delle se deceo a hũ Campo, pello qual entre mutas casas, se foy caminhãdo té hũa grãde Ribeira, em que havia muitos Cavallos Marinhos, a qual segũdo os Negros affirmavão era a mesma, donde se partio pella menhã, que cõ muitas voltas rodeava aquella terra. Iunto della se alojarão os Nossos, & resgattarão dos Negros 6. Vacas por hũa Verruma grande, /fol.68/ & pedaços de Cobre, que pezarião hum Arratel. †

カフル人の中からひとりが、ただ通訳とだけ話したいと、彼らから離れてこちらにやってきた。ピロットがこれを見て、通訳にいったいどうしたのか、と尋ねた。通訳は答えた。例の黒人が言うには、今辿っている道をそのまま歩いてはならない。その道は永いあいだ使われぬままに放置されている。さらに言えば、多くの山並みが連なり、広範囲にわたって人煙は絶えている、と。さらに黒人が言うには、すぐそこに見える山並みに沿って続いている別の道を辿るがよからう。その道は今歩んでいる道ほど人里から隔たっていないし、起伏も多くない、と。これを聴いたピロットは、黒人の教えてくれた道がよい、この道のほうが進路的にも理に叶っている、と考えたので、その旨ヌーノ・ヴェーリョに言上した。そして黒人とわが通訳とのやりとりをすべて伝えた。カピタン・モールはどちらの道をとるか、その選択をピロットに一任した。カフル人に対しては、その厚意に報い謝礼もはずむという約束とともに、そのルートをやくためのガイドをみずからへ提供して欲しい、と願った。にもかかわらず、彼らはそうはしたがらなかった。ゆく手に立ち足はだかる無住の地に不安を覚えたのである。というわけで、翌日、いよいよ人煙の絶えた土地に入るのに備え、その夜、ウシ2頭を屠殺し、これを皆で分配した。手もとに残ったウシは26頭であった。いずれも非常におとなしく、どのポルトガル人にも御することができた。

† Destes Cafres se apartou hum á falar só com a lingoa, & vendoo o Piloto, & perguntandolhe, o que entre elles passara, respondeo, que o Negro lhe dissera, que não fossem por aquelle caminho, que levavão, porque era muy antigo, & desusado, & por ter muitas serras despovoado hum grande espaço, & assi que era melhor, seguir o outro, que hia ao longo de hũa serra, que junto delles delles estava. O qual não era tão ermo, nem aspero, como o outro. Pareceolhe bem ao Piloto o caminho que dezia o Negro, & mais á preposito da sua derrota, & assi o disse á Nuno Velho, referindolhe tudo o que entre os Negros passara. O Capitão Mór deixou nelle á eleição do caminho, & posto que se pediraõ aos Cafres Guias pera elle com largas promessas de satisfação, & paga, nunca o quiserão fazer, receando o despovoado, que havia. E assi pera entrar por elle ao outro dia, se matarão aquella noute duas Vacas, que se /fol.69/ destrubuirão entre todos, & ficarão vinte & seis ja muy domesticas, & que qualquer Portugues apacentava.

【4月26日】夜が明けると、一行は山並みへ向かって前進を開始した。そしてそれを周回するため東へ向かった。この山並みを黒人はモシャンガーラと呼ぶ。山並みはたいそう緑豊かで、涼しく、爽やかである。そして水が非常に豊かであり、山並みに沿う道を辿っていた2日間に、一行は23本もの河を横切ったほどだ。そのうち3つはかなり大きな河であった。この日は幾つかの河を渉り、午後4時、山並みが高く盛りあがったそのたもとに辿り着き、そこに野営地を設けた。ここに朝方出逢った黒人が4人やってきた。彼らは珍しいもの見たさに一行に逢いに

きたのだ。彼らの首領(その名をカティーネという)はジェラル[カピタン・モール, すなわちヌーノ・ヴェーリョのことか]へ牛乳を満した革袋を差し出したので、彼はこれに対する支払いをチェスの駒をもって行なった。そしてチェスの駒を白い絹糸に結んでカティーネの首に懸けてやった。

xxvj. [26 de Abril]

Começarão em amanhecendo de caminhar pera a Serra, & pera a rodearem forão á Leste, chamãolhe os Negros Moxangala, he muy viçosa, & fresca, & tão abundante de Agoas, que em dous dias, que os Nossos fizerão a estrada ao longo della atravessarão vinte & tres Ribeiras, das quaes as tres erão muy grandes: algũas se passarão este dia té as quatro da tarde, em que chegando ao pee de hum alto della, se assentou o Campo. Vierão com os Nossos á este Alojamento quatro Negros, que encontrarão pella menhã, os quaes por maravilha os vinhão ver, & o principal delles (chamado Catine) apresentou ao Géral hum Fole de Leite, que lhe elle pagou com hum Trebelho de Enxedres, que atado em hum fio de Seda branca lhe deitou ao pescoço. †

4 人のカフル人は、今辿っている道で差し支えない、と保証したので、ヌーノ・ヴェーリョは、その道を案内してくれる者を提供して欲しい、と願ったところ、彼らはそうしようと約束した。ただし、支払いが無住の地をゆく労苦に見合うものであることが条件だという。我らの提示した支払いに彼らも異存はなかった。というのは、真鍮の蠟燭立てをひとつ見せると、彼らは満足の様子を示したからだ。その夜、彼らは我らと一緒に過ごした。そして連中のふたりに命じ、翌日の物々交換に必要なウシどもを取りにゆかせた。

† Aprovarão estes Cafres o caminho, & pedindolhes Nuno Velho, que por elle /fol.70/ o guiassem, prometerão de o fazer se a paga fosse igoal ao trabalho, que o muito despovoado merecia. Não se desavieraõ nella, porque como lhe mostrarão hum Castiçal de Latão, ouverãosse por satisfeitos, & ficando aquella noute com os Nossos, mandarão dous dos seus buscar Vacas pera resgatar o outro dia.

[4月27日] この日、上述の山並みに沿って行進を続けていると、ウシを取りにいったふたりのうちひとりが高台に姿を見せた。ただし約束のウシを連れていなかった。これを見たカティーネは遁走してしまった。もうひとりの黒人はリーベというのだが、我らはこの男を取り押さえた。すると彼は自分が捕らわれたものと思い、他の仲間に向かって驚愕と恐怖の交錯した叫び声を上げた。仲間はこれを遠くから慰めるばかりであった。この男はしかし、おとなしさを取り戻した。言うことを聞けば悪くはせぬという約束や、掴ませた贈り物のおかげであった。その贈り物のひとつが、リーベの連れ合い、つまりカティーネへ与えると約束していた蠟燭立てである。やがて彼は我ら一同のガイドとなることを是認した。ただし縛られたままである。一行は山並みに沿って前進し、河がそのあいだを流れる岩場の蔭で暑熱をやり過ごした後、午後になってから北東へ向けて前進を再開した。日没頃、その山の端を通過し、河にぶつかった。この河は鬱蒼とした森のあいだをきわめて激しく流れていた。我ら一行はそのかたわらで野営し、2日の行路に必要な食糧をとった。

xxvij. [27 de Abril]

No qual caminhando ao lōgo da mesma Serra, & assomando em hũ alto hum Negro dos que forão buscar as Vacas, sem ellas, o Catine se acolheo, & do outro que se chamava Noribe deitarão mão os Nossos, que vendosse preso, com grande espanto, & temor bradava pellos outros, que de longe o cōsolavão. Domesticousse porem com promessas, & dadas, sendo hũa dellas o Castiçal prometido ao companheiro, & ouve por bem de guiar a nossa Gente assi amarrado. A qual seguindoo ao longo da Serra, & passando a calma á sombra de hũs Penedos, pellos quaes corria hũa Ribeira, fizerão o caminho /fol.71/ a tarde ao Nordeste, & ao Sol posto acabarão de passar a Serra, & chegarão á hum Rio, que com muita furia corria por hum grande bosque. Ao longo delle se agasalhou o Arrayal,

& tomou mantimento necessario pera dous dias.

【4月28日】 一行は大きな石伝いにこの河を涉った。そしてしばらく平坦な土地を進んだ後、もうひとつ別の山並みにぶつかった。この山並みは東から延びてきて、一行が踏破したばかりのモンヤンガーラの山並みに連結している。山並みと山並みに挟まれて谷があり、谷はまっすぐ北東へ延びており、谷沿いに道がついていた。一行は、谷が続く限り、これに沿って前進を続け、やがて谷から別の山並みに登った。その山並みの高みに到ったところで、案内役の黒人ノリーベが逃げた。ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラは、ノリーベをターバンのようなかぶりもので縛っていたのだが、飛ぶような歩幅で河をびよんびよん飛び越え、ノリーベはすごいスピードで遁走した。我らはこうしてガイドを失った。現在地から下り、もう一度別の丘に上った後、今、どの道を通っているのか、わからなくなった。それはこの丘が一枚岩であったからである。丘からは牧草が豊かに茂った平地を望見することができた。平地が尽きるあたりに、ふたつの山並みに挟まれた、大きな丘がふたつ望まれた。それらの丘はいずれも北東方向に位置しており、また、丘と丘とのあいだを縫ってゆけば、うまい抜け道が得られるであろうと思われたので、ピロットの指示により、わが一行はその方角へ直進することにした。そのとおりに行なわれた。ふたつの丘を越えたところで、ひとつの大きな岩場のあいだを流れる河に行き逢った。薪はなかったけれど、その河のそばで夜営した。薪は本当に必要であった。当夜、雨を伴う稲妻が轟いたからである。

xxvii. [28 de Abril]

Passousse o Rio por algũas pédras grandes, que nelle havia, & caminhando por terra chaã, encontrarão com outra Serra, que vinha de Leste ajuntarse com a passada de Moxangala, & entre ambas havia hum Valle, que corria ao Nordeste com estrada seguida. Por ella caminharão os Nossos em quanto durou o Valle, & delle sobirão á outra Serra, em cuja alto se soltou o Negro que guiava, de hũa touca, com que Nuno Velho Pereira o trazia attado, & com hum grãde salto, atravessando hum regato fogio correndo muy ligeiramente. Ficarão os Nossos sem Guia, & depois que baixarão donde estavam, & sobirão outro Monte, nelle por ser todo de pédra, perderão o caminho que levavão. Virão delle hũa /fol.72/ Campina de abundoso pasto, & no cabo della dous grandes Outeiros, que entre duas Serras ficavão. Os quaes porque estavam ao Nordeste, & por entre elles parecia que teria o caminho melhor saida, ordenou o Piloto, que á elles endereitasse o Arrayal. Assi se fez, & alem destes Outeiros, encontrando com hũa Ribeira, que corria por hum grande rochedo, nella se alojou sem Lenha, que fora bem necessaria pera hũa trovoada, que ouve aquella noute com chuva.

【4月29日】 夜が明けるや、岩を伝い、膝まで水に浸かりつつ、その河を涉った。河向こうの土地は平坦で、ゆく手には、いずれの側にも高い山があり、緑の大樹にびっしりと覆われている。涉り終えた河はあたり一帯を切り裂くように流れており、くねくねと蛇行を繰り返していた。ついにこの日、この河を5回にわたって横切った。11時になって、やっと大きな岩場の蔭で暑さをやり過ごした。暑さが和らいだところで前進を再開し、やがて多少の木々が生い茂った岩場で夜営した。これに勝る野営地はありそうもなかったからである。そこで強い風雨に悩まされながら一夜を明かした。

xxix. [29 de Abril]

Amanhecendo se passou a Ribeira por Penedos, que nella havia, dando a Agoa pello Giolho. Era a terra da outra banda chaã, & de hũa, & da outra parte havia Montes altos, cubertos de Arvores grandes, & verdes. Cortavaa toda a passada Ribeira, que por ella hia fazendo muitas voltas, & assi a atravessarão os Nossos neste dia cinco vezes. As onze á sombra de grandes Penedos passarão a calma, a qual abrandando se continuou o caminho, & em hũa Penedia em que havia al/fol.73/gũas Arvores, se recolherão por não acharem outro melhor alojamento, no qual com

grande chuva, & vento se passou aquella noute.

【4月30日】4月最後の日の朝、ゆうべの野営地に隣接する丘に上った。その頂から下を見下ろすと平坦な土地が続いていた。その土地を通過した後、一行はふたつの丘に挟まれて流れる、かなり水量の豊かな河を涉った。ふたつの丘のひとつに上ってみたが、それはどこかに人里があるのではないかと期待したからである。しかし現在地は人里からずいぶん遠かった。それが視界に入らぬことに一行はがっかりときた。谷へ続く今しがた通ってきたばかりの道を伝って再び丘を下りた。谷には薪水があったので、午後3時、そこに野営地を設けた。

xxx. [30 de Abril]

Ao derradeiro de Abril se sobio pella menhã hum Monte, que estava junto da stança, & do Cume delle seguia a terra chaã, que passada, se atravessou hũ grosso Ribeiro, que entre dous Montes corria. Sobirão os Nossos hum delles com esperança de descobrir povoado, mas estavam muy longe delle, & desconsolados de o não verem, o tornarão a decer, por hum caminho, que virão seguido, á hum Valle, onde por haver Lenha, & Agoa se agasalharão ás tres horas.

【5月1日】翌日すなわち5月1日、わが一行は夜営地からそう隔たっていない森の中へ入り込んだ。森の木々は皆高く、鬱蒼として、頭上にのしかかるようであり、その日はゆうべと同様、風雨が強かったにもかかわらず、森にいる限りはあたかも家々に守られているかのようであり、苦痛は感じなかった。これ以上の前進は行なわぬという決心とともに、森の中を横切っている河沿いに野営することにした。強まる風雨と寒気がそれを許さなかったからである。それでも正午に太陽の高度を測る機会があり、ピロットの観測によって、わが一団の現在地は南緯29度53分と判明した。この知らせは一行の現下の苦しみを和らげるとともに、ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラとその一行を大いに喜ばせた。ピロットはまたこうも確言した。我らはこの地方で最も険しく、岩場の多い難所をすでに通過した。弱っている人々も力を奮い起こして欲しい。行進を続け6月末にロウレンソ・マルケスの河へ到達するためだ。6月末と言えば、モサンビークへ向かう交易船がそこを発つ頃だ、と。ピロットのロドリーゴ・ミゲイスは上のように考える根拠として、現在地の緯度がテーラ・ド・ナタールの端のそれに等しいことを挙げた。つまり、我らは、テーラ・ド・ナタールの沿岸部にあつてこれ以上ないほど高緯度〔つまり南〕に位置しているのだ(それに誤りはなかった)。その証拠に、一帯は海上にあつても厳しい寒気や、陸上にあるとき以上に激しい雷雨に見舞われる。今、我らが遭遇しつつある天候がまさにそれだ、というのである⁵⁶。

j. Mayo [1 de Maio]

Meteraõsse o outro dia primeiro de Mayo, em hũ Bosque (que perto do Alojamento estava) tão alto & espesso, & cerrado por cima, que sendo o dia muy ventoso, & chuvoso, & semelhante á passada noute debaixo delle como em abrigadas casas, se não sentia. E ao lôgo de hũ Ribeiro, que o atravessava se assentou o /fol.74/ Arrayal cõ determinação de não fazerem mais larga jornada, porque o vento, a chuva, & o frio o não cõsentião. Derão porem lugar de se poder tomar o Sol ao meyo dia, & saber o Piloto que estava em 29. Graos, & 53. Minutos. A qual nova

⁵⁶ 原文は ‘Fũdavassee Rodrigo Migueis (& cõ razão) em ser a altura que achou do fim da terra do Natal, que he a mais alta de toda a outra daquella Cõsta, & pello ella ser, ha na mesma parajem no Mar, grandes frios, & muito mayores trovoadas.’ であり少々わかりにくい。この箇所をボクサーは ‘Rodrigo Migueis based this opinion (and rightly so) on their present latitude being that of the end of the land of Natal, which is higher than that of any other part of the coast, and in consequence there is in this region intense cold at sea and still more violent thunderstorms.’ と訳す。文脈上拙訳(補足を多く交えざるを得ない)のようなことが述べられているはずだと思う。

aliviou os presentes trabalhos, & alegrou a Nuno Velho Pereira, & á mais cõpanhia affirmãdo tâbem o Piloto, que tinham ja passado o aspero, & fragoso daquella terra, pello que se esforçassem os fracos pera caminhar, & chegar ao Rio de Lourenço Marquez no fim de Junho, que era o tempo, em que delle partia o Navio do resgate pera Moçâbique. Fūdavasse Rodrigo Migueis (& cõ razão) em ser a altura que achou do fim da terra do Natal, que he a mais alta de toda a outra daquella Cõsta, & pello ella ser, ha na mesma parajem no Mar, grandes frios, & muito mayores trovoadas.

[5月2日] 翌日の朝、雷鳴がやみ、静穏な天候となったので、野営地を撤収し、森を抜け出て、緩い斜面を前進した。そこから平らな土地へ下り、さらにそこから幾つかの丘にぶつかった。それらの丘を通過した後、一同はある山の高みで一息入れた。谷でそうであったようにここでも水を見つけた。ここでポルトガル人がひとり瀕死に陥った。彼の名をアルヴァロ・デ・ポンテという。かねて病状重く、ここ3~4日間の道中では、不憫に思った仲間の背中におぶわれていたのだが、数日来の寒さが彼を完全に消耗させた。ペドロ修道士も無言でこの男を置き棄てた。男奴隷ふたりと、ドナ・イザベル付きの女奴隷ひとりもまた同じ容態に陥ってそのまま置き棄てられた。こうして仲間[アルヴァロ・デ・ポンテ]を失っても、暑い盛りをやり過ぎすと、我らは谷に沿って前進を再開するほかなかった。谷にはかなり大きな河が流れていた。ほとんど夜のとぼりが下りたので、その河のそばで野営した。この地点からピロットは北および北東の方角に雪をかぶったかなり長大で高い山並み⁵⁷を認め、一行を導く方角をひきつづき東北東とすることに決した。翌日の行進ではそのとおり実行された。

ij. [2 de Maio]

Cessarão estas na menhaã do dia seguinte, & abonçou o tempo, pello que se levantou o Câpo, & sayo do Bosque marchando por hũa pequena Cõsta, da qual /fol.75/ baixou á hũa terra chaã, & della a hũs Outeiros, que passados descansarão os Nossos no alto de hũ Monte, no qual como nos Valles acharão Agoa. Ficou morrendo nelle hũ Portugues por nome Alvaro de Põte, que vindo muy doente, & tres, ou quatro jornadas ás cõstas dos Cõpanheiros com grãde charidade, o frio dos dias atras o acabou de todo, deixou⁵⁸ ja Fr. Pedro sem fala, & no mesmo stado ficarão dous escravos, e hũa escrava de D. Isabel. Cõ este Cõpanheiro menos, caminharão os Nossos depois da calma, por hũ muy lôgo Valle, onde acharão hũa grande Ribeira, jũto da qual se agasalharão sendo quasi route. E daqui vendo o Piloto, que pera o Norte, & Nordeste ficavão grandes, & altas Serras cubertas de Neve, determinou de guiar á Lesnordeste, como fez na jornada seguinte.

[5月3日] この日の行程はたいそう労苦が多く、少なからぬ丘を上り下りし、さらに丘から山へ登った。ふたりの男が人里を発見できぬかと山の頂に向かったが、しかし朗報を得ることなく下りてきた。ただ東北東に煙が4本立ち昇るのを目撃したと報告した。この報告に一同は多少元気を取り戻した。進みつつある方角に人里があるという兆しであろうと思われたからだ。しかし煙は狩人のそれにすぎなかった。当地の黒人の部落では煙が立ち昇ってはいても、弱々しく、火のある家でもそこから煙が上がっていることはめったにない。わが一行はまっすぐに進み、ある河に面した低地に野営した(そこは薪には困らなかった)。ただそこへ至るまでにふたつの山を通過し、その河の流れる谷間に下りてゆくのが大変であった。

⁵⁷ 現、ドラケンスベルフ(ドラケンスバーグ)山脈(the Drakensberg)。最高点はダバナストレニャナ山(標高 3482m)。しかし「北東」というのはたぶん「北西」と読まれるべきであろう。サント・アルベルト号難船から一命をとりとめたポルトガル人一行こそ、この山脈を最初に見たヨーロッパ人であろうと思われる(*The Tragic History of the Sea*, ed. C. R. Boxer, p.146, note 2)。

⁵⁸ 初版本に“deixouoo”とあるのを校訂する。

ijj. [3 de Maio]

Foy ella muy trabalhosa, sobindosse muitos Outeiros, & delles hũ Monte. Ao seu cume forão dous homens, á descobrir povoado, baixarão sem novas delle, mas /fol.76/ derão noticia, que á Lesnordeste virão quatro fumos, com que a Gente se animou algum tanto, parecendolhe que ao Rumo, perque caminhava⁵⁹ havia sinal de Povoação. Mas não era senão de Caçadores, porque o fumo das Povoações destes Negros he tão pequeno, que quasi se não enxerga na casa, em que ha fogo. Pello que tirando ao mesmo dereito assentousse o Arrayal em hum baixo, junto de hũa Ribeira, em que não faltava Lenha havendo primeiro passado, por entre dous Montes pera decer ao Valle perque ella corria.

【5月4日】翌日、おびただしい夜露の中を小高い丘に登った。この丘は背の高い草にびっしり覆われていて、我らの一行同士が見えなくなるほどであり、この丘を歩もうとすれば、ばらばらに進むしかなかった。この丘から平地に下りると、これまでに行き逢った中で最も大きく、水量豊かな河にぶつかった。河は北から南へ流れていた。どこで渡渉可能かを探るため、ピロットが従者を連れて河沿いを下流へ向かった。同じ目的で、別の男ふたりは上流へ向かった。しかし、一団が小休止しているところに勝る渡渉地点はないと思われた。というのは、すぐ眼前に中州があり、水は二手に分かれ水流は分散し、その勢いはより緩くなっているからだ。わが同胞たちはこの地点で河を渉る決意を固め、まずふたりの男が槍を手にして河を渉った。水は胸に達していた。ふたりは辿るべきコースを教えるため仲間の待つところへ戻った。ただちに、最も頑強な連中がまず河に入り、対岸まで次々に槍を渡すべし、という指示が下された。その槍にしっかりと掴まって(これを手すりのようにして)弱っている者や婦人が渡渉した。病人は慈悲深くも仲間に肩車されたり、ドナ・イザベルのハンモックにくるまれたりして対岸へ運ばれた。ドナ・イザベルとその娘も水に浸かり河を渉ったが、それはフランシスコ・ダ・シルヴァとジョアン・デ・ヴァラダーレスそれぞれの腕に抱かれてであった。同じ方法でカピタン・モールも渡渉した。こうして河を渉り終えるのにこの日がまるまる消えた。全員が無事対岸に落ちつくや(家畜[ウシ]は無難に河を渉り、一足先にそちらに着いていた)、大きな焚き火が熾されて、濡れた体を暖め、乾かした。そして大木のたもとに天幕を張り、その中で一夜を明かした。それにさきだって午後うちに密林を巡り、ナツメヤシとギンバイカの実をたくさん採集しておいた。

Com grande orvalhada, se sobio o outro dia, hum pequeno Outeiro, cuberto de tão grosso, & alto Feno, que se não vião os Nossos hũs aos outros, & pera poderem caminhar, o hião apartando. Do Outeiro decendo á hũa terra chaã, acharão o mayor, & mais caudaloso Rio, que té li tinhão encontrado, corria do Norte ao Sul, & pera apalpar o Vao, foy por elle abaixo o Piloto com outro cõ/fol.77/panheiro, & o mesmo fizeraõ outros dous homens por elle arriba. Mas em nenhũa parte o acharão taõ bom, como onde estava o Arrayal parado, porque fazendo naquelle dereito hũa Ilheta, repartiasse em dous braços, & assi hia a Agoa espalhada, & corria com menos furia. Pello que resolutos todos vadealo naquelle lugar, passaraõno primeiro dous homens com Piques nas maõs dandolhes a Agoa pellos peitos, & tornaraõ onde ficaraõ os cõpanheiros, pera lhes ensinar o passo. Ordenousse logo que os mais rijos se metessem na Agoa, & de hũs á outros, se atravessassem Piques, nos quaes pegados como em Mainel, passaraõ os fracos, & Molheres: os doentes com grande charidade foraõ passados á outra banda aos hombros, & nas Machiras de D. Isabel, a qual, & sua filha metidas na Agoa atravessaraõ o Rio levadas de braço de Frãisco da Silva, & de João de Valadares, & da mesma maneira passou o Capitaõ Mór. Gastousse nesta passagem todo o dia, & /fol.78/ postos todos da banda de alem (onde ja estava o Gado, que atravessou muy bem o Rio) fizerãosse grandes fogos, em que se aquentarão, & enxugarão; & armando suas tendas, debaixo de grandes Arvores, nellas se

⁵⁹ 初版本に“chaminhava”とあるのを校訂する。

recolherão aquella noute, depois de colherem á tarde pello mato muitas Maçaãs de Anafega, & Murtinhos.

【5月5日】ゆうべの野営地に相対して丘があった。我らの一行は朝からその丘に上った。この丘を越え、さらに丘を幾つか越えたところで木蔭に入り、シエスタをむさぼった。そしてその場所でありついたスイカを食べてすっかり爽快な気分になった。スイカの味がさらにおいしく感ぜられたのは、ある高台に3人の黒人がたたずんでいるのをちらりと見たからである。ヌーノ・ヴェーリオ・ペレイラは、みずからの奴隷をひとり黒人たちのもとへ遣わした。この奴隷は、永くカピタン・モールと行動をともにしてきたので言葉[ポルトガル語]がわかる。彼は例の3人を連れ帰り、ヌーノ・ヴェーリオに引き合わせた。3人の男は「アララ、アララ」と言いながら、カピタン・モールへ挨拶を送った。これまでに目撃したカフル人が常用していたのとは異なる挨拶であった。3人はごく近いところに集落があるという、我らにとって待望の報せを伝えた後、そのうちのひとりが丘のあちら側に残した8人の仲間を呼びにいった。やがて彼らが皆で戻ってきた。（暑い時間帯をやり過ぎてから）彼らは我らの一団とともに前進した。ところがもう日も暮れかけているし、今夜のうちに部落へ達するのは無理だから、我らの小屋に泊まってくれないか、と彼らは我ら一行に頼んできた。カピタン・モールはそれでよかろうと考えた。それを聞いた黒人たちは、とても深く、しかも棘のある木々に鬱蒼と覆われた谷へ一行を誘い込んだ。こんなところに人が暮らしているとは思われぬ、棲んでいるのは猛獣くらいであろうと思われたので、一行は警戒心を高め、ただちに武器が取れるよう準備した。こんな谷で彼らの裏切りに遭うのを怖れてのことである。しかしながら、我らとしてはカフル人についてゆくしかなかった。やがて高くて、ごつごつした岩場にさしかかったところで（岩場のあいだを河が流れている）、6軒の小屋を見た。我らを導いてきた蛮人どもはそこで妻と生活しているのだ。小屋のそばに野営地を設けたが、いつもながらの監視を解くわけにはゆかなかった。

v. [5 de Maio]

Estava defronte do Alojamento hum Monte que sobirão, como foy menhã, & passado este, & outros sestearão á sombra de hũas Arvores, refrescandosse com Balancias, que naquelle sitio havia, as quaes parecerão mais gostosas, cõ a vista de tres Negros, que os Nossos enxergarão em hum alto. Mandou Nuno Velho Pereira á elles hum escravo seu, que cõ a continuação sabia ja a lingoa, este os trouxe consigo, & lhos apresentou, os quaes o saudarão dizendo Alala, Alala, differente saudação da que usavão os passados. & depois de darem as desejadas novas do povoado, & que estava perto, tornou hũ delles á chamar outros oito compa/fol.79/nheiros, que detras do Monte deixâra. Voltarão todos, & caminhãdo cõ os Nossos (passada a calma) sendo ja tarde lhes pedirão, que por não poderem hir aquella noute ao povoado, quisessem parar nas suas casas. Pareceo bem ao Capitão Mór, & assi guiarão os Negros á hũ Valle muy fundo, & de espinhoso Matto cuberto, & não parecendo, que poderia ser o lugar habitado, senão de Feras, prevenirão os Nossos, & aprestarão as Armas, temendosse nelle de algũa traição. Cõ tudo seguirão os Cafres, & entre altos, & asperos Rochedos, pellos quaes corria hũ Ribeiro, viraõ seis casas, em que estes Barbaros viviaõ cõ suas Molheres, & jũto dellas se assentou o Arrayal cõ a costumada vigia.

【5月6日】このような監視のもとでは、多少の家畜を奪い、我ら手持ちのものを手当たり次第に奪おうというみずからのもくろみ（かの荒地ではそのような略奪と、狩猟で殺す動物とが彼らの生活の糧なのである）を、黒人どもは実行に移せぬと判断した。わが同胞たちの怒りを買ひ、懲らしめられるのではないかと考えたのである。そのせいであろう、連中は夜のうちに妻と子ども逃げ散ってしまった。多少のトウモロコシ——まだ穂がついていた——は持ち出してあったが、小屋には投網と、鳥を捕らえる罟が残してあった。陽が高く上った頃、道案内してくれる黒人がいないかどうか、あたりを見廻し、すっかりその姿が消えているのを確かめてから、ヌーノ・ヴェーリオは、カフル人のガイドがいなくなったときにはいつもそうしていたように、ピロットに対し我らを先導せよと命じた。ピ

ロットは進路を東に向けるよう指示した。ところが長いあいだ前進したのに一向に集落は視界に入らなかったの、カピタン・モールの命により、数名がふたつの高台へ赴いた。それらは一行の現在地から見て東および北東の方角に位置していた。しかしどちらに赴いた連中も、一行が熱烈に望んでいたもの〔集落〕を発見することはできなかった。我慢の足りぬ連中が動揺しだした。このままセルタン⁶⁰を辿っていてはだめだ。人など住んでいないではないか、と騒ぎ、俺たちを連れてゆくなら海へ連れてゆけ、海のほうへ、と声高に要求した。ピロットとメストレは、今辿っている東へのコースこそ海へ至るための最短経路なのだと、連中に言い聞かせた。ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラがこの言葉に賛意を表すると、やっと連中は鎮静した。そこで野営地を撤収し、これまでどおり進路を東にとり、人が歩いた形跡のある道に出た。その道を我らは夜までゆっくり前進した。やがてある河のほとりで野営した。あたりは牧草こそ豊かであったが薪はほとんどなかった。

vj. [6 de Maio]

Vendo os Negros, que com ella não podiaõ executar suas tenções, que eraõ roubar algũ Gado, & o mais que pudessem, do qual exercicio viviaõ naquelle despovoado, & da caça que matavaõ, parecendolhes, que poderiaõ ser sentidos, & castigados, fogiraõ aquella noute com as molheres, levãdo hũ pouco /fol.80/ de Milho, que ainda estava em espiga, não deixando nas casas mais, que laços, & armadilhas. E sendo ja alto dia, quando os acharaõ menos (depois que se buscaraõ pera mostrarem o caminho) mandou Nuno Velho, que guiasse o Piloto como sempre fazia em semelhantes faltas. Ordenou elle que se fizesse a estrada á Leste, & havendo caminhado hũ grande espaço, sem verem povoado foraõ por ordem do Capitaõ Mór algũs homens á dous altos, que ficavaõ ao Leste, & ao Nordeste do lugar onde estavaõ, mas nem hũs, nem outros descobriraõ o que tanto desejauaõ. Começaraõsse amotinar os impacientes, reprovando a jornada do Sertaõ por desabitada, & pedindo á vozes, que os levassem, & encaminhassem ao Mar. O Piloto, & o Mestre lhes mostraraõ como a via de Leste que seguiaõ, era pera o Mar a mais breve, o que sendo aprovado por Nuno Velho, os aquietou, & levantandosse o Campo, & hindo ao mesmo Rumo de Leste deraõ em hum cami/fol.81/nho seguido, pello qual caminharão de vagar té a Noute, que se agasalharão ao longo de hum Ribeiro, em que havia muito Feno, & pouca Lenha.

[5月7日] 次の野営地では反対のことが生じた。一行が野営を行なったのは、大木が鬱蒼と生い茂る密林の下であり、水はなかった。この日の午前中、辿ってきた道は一貫して良好であり、しかも人の辿った形跡があった。しかし午後になって谷へ入りこんだところで、道に迷った。しかしもうひとつ別の道にぶつかった。それは、ある高台に野営地を定める少し前であり、幾つか別の丘に上り、遠くに黒人ふたり(真昼の休憩をしているところであった)を眺めた後である。ふたりは我らを認めるや、逃げ散ってしまった。

vij. [7 de Maio]

O contrario lhes socedeo no Alojamento seguinte, que o fizerão debaixo de hum Bosque, de grandes Arvores, sem Agoa, havendo caminhado a menã toda por caminho bom, & seguido, & perdendoo á tarde em hum Valle, tornarão achar outro, pouco antes que se recolhessem em hum alto, depois de terem sobido outros, & visto de longe dous Negros (quando ao meyo dia descansavão) os quaes como descobrirão os Nossos fogiraõ.

[5月8日] 人煙の絶えた土地を進むという旅程はここで終わった。我らは14日をかけて無住の土地を踏破し

⁶⁰ 原綴り“Sertão”。「奥地」の意。イベリア半島のポルトガル語では今、この語彙から「奥地」という元来の意味は消滅している。他方、今日のブラジルで16世紀以来の意味がそのまま保存されこの語彙は用いられている。ポルトガル語の古層がむしろ現代ブラジルに残ることを語彙面から示す一例。

たのだ。当カブラリアにあつて今後この道を辿るかもしれぬ人は、旅程を短縮するため、南緯30度に達し次第、必ず東北東へ向けて進路をとること。この方向に進路をとる限り、荒れ地の通行はわずかで済むし、人里へはより速やかに達するであろう。5月8日、わが同胞たちはそのような土地に入った。そこはあらゆる食糧がいとも豊富であつたので、一行は無住の地で感じつづけた空腹感をすっかり忘れてしまった。もつともウシはいつも食べていたけれど。ウシは無住の地に入ったとき27頭であつたが、うち12頭が今なお手もとに残っていた。

vijj. [8 de Maio]

Terminouse o despovoado na jornada passada, que em catorze dias se atravessou, & pera ser menor, quem fizer o caminho por esta Cafraria, como se achar em trinta Graos de altura, fação á Lesnordeste, porque por este Rumo, passará menos deserto, & encontrará⁶¹ mais depressa com terra povoada. Na qual os /fol.82/ Nossos entrarão aos oyto de Mayo, & tão abundante de todos os Mantimentos que os fez esquecer das faltas, que delles tiverão no Ermo, posto que comerão sempre Vacas, & das xxvij. com que nelle entrarão chegarão aqui com xij. †

この日、夜明けを待ちかねて、一行は前進を継続した。道中、黒人4人に行き逢った。4人は他の仲間と連携を保ちつつ、ずっと以前から我らを観察し、監視しつづけていた。彼らは我らの一団のような多人数のグループから危害を加えられるのではないかと、恐れて、敢えて近寄つてこなかった。ヌーノ・ヴェーリヨは、姿を現わした4人へアントニオ・ゴディーニョを遣わした。通訳のアントニオがこれに付き添つた。アントニオ・ゴディーニョが差し出した銅のかけら幾つかを携え、4人のうちの3人がその場で待ち、残りのひとりが丘のむこうに隠れている約50人の仲間を呼びにいった。

† Como foy menhã deste dia continuarã seu caminho, em que encontrarã quatro Negros, os quaes com outros muitos havia grande espaço, que vião os Nossos, & se vigiavão delles, & receosos do mal, que lhes podia fazer tanta Gente, não ousavão chegar, pello que mãdou Nuno Velho á estes quatro, que se descobrirão, Antonio Godinho, cõ Antonio o Lingoa, & com hũs pedaços de Cobre que lhes deu, esperarão tres delles, & o outro foy chamar algũs 50. que detras de hum Outeiro estavão escõdidos. †

彼らは皆でわが一行のもとへやってきた。おもだった連中はヌーノ・ヴェーリヨを取り囲み、当地の肥沃さや、人煙の絶えぬことについて延々と喋りつづけた。さて、食糧の取引を話題にしようとする、ふたつの部落に向け道が二手に分かれているところで、カフル人のあいだに諍い^{いさか}が始まった。ふたつの部落のうち、我らがまずどちらを訪ねるべきか、をめぐつてのそれである。(たまたま居合わせた)4人のうちの首領格へヌーノ・ヴェーリヨがタンバークァ⁶²の指輪——これはゴンサーロ・メンデス・デ・ヴァスコンセーロスの指から外したものだ——を差し出したことにより、騒ぎには終止符が打たれた。ヌーノ・ヴェーリヨは次のように約束した。ウシとの物々交換は君たち全員と行なうとしよう。ただしその手始めは一番近くの住人からとしたい、と。例の4人のうちひとりの呼びかけに応じてやってきた黒人50人のほうが、この条件を満たしていた。彼らは皆、歌い踊りながら、我らをこれまでどおり東北東へ導いた。やがて彼らと一緒に鬱蒼と木々の生い茂る、水も豊かな谷に辿り着いた。すでに午後であつたし、部落まではそこから半レグアばかりある由であつたので、わが一行は大休止することにした。我らに逢うためやってくる半レグアの道のりなど、黒人には遠いとは見なされぬようであつた。少なからぬトウモロコシや、大きさとい

⁶¹ 初版本にはこうあるが、これは大過去形ではなく未来形の“encontrará”である。

⁶² 原綴り“Tambaqua”。銅と亜鉛の合金。マラヤ語の“tambága”に由来する。Cf. Sebastião Rodolfo Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, II, New Delhi, Asian Educational Services, Reprint: 1988, First Published: 1921, p.346.

色といい、我らのトウモロコシと瓜ふたつの穀類——この穀類を彼らはアメイショエイラ⁶³と呼ぶ——を粉に挽いたもので作った菓子、さらにはマメや、小ぶりなソラマメ大のジューゴと呼ばれる野菜。そればかりか、彼らは牛乳とバターも持ってきた。こうした食糧をわずかばかりの鋏や釘との交換で譲ってくれた。

† Vierão todos ao Arrayal, & os principaes acompanhando Nuno Velho, lhe forão dando largas novas da fertilidade, & Povoação daquella terra, & trattandosse do resgatte dos Mantimentos onde o caminho se dividia em dous /fol.83/ pera duas Povoações, ouve entre os Cafres differença, sobre qual das Aldeas seria a primeira á que os Nossos fossem. Aquietarõesse dando Nuno Velho ao principal dos quatro (que se encõtrarão) hũ Anel de Tabaqua, que se tirou do dedo á Gonçalo Mendez de Vasconcellos, & promettendo, que a todos resgataria suas Vacas, começando pellos mais vezinhos, que erão os 50. que ao chamado de hũ dos quatro vieram, & bailando, & cantando todos encaminharão os Nossos, pera a mesma parte de Lesnordeste, & cõ elles chegarão á hũ Valle de muito Arvoredo, & Agoa, onde por ser ja tarde, & estar daly o Povoado algũa meya legoa se assentou o Arrayal, não lhes pareceo longe aos Negros pera virem á elle ver os Nossos, trazendo muito Milho, & bolos feitos da farinha de hũa semente do tamanho, & cor do nosso Milho, chamada delles Ameixoeira, & Feijões, & hum ligume chamado Iugo, que he do tamanho de Favas pequenas, & assi Leite, & Manteiga, que por poucas tachas, & pedaços de /fol.84/ prégos davão. †

当地の蛮人の中には、ガマの藁で編んだ衣裳を身に纏う若者が数人混じっていた。これは身分ある若者の装束であり、これに身を包んでいる限り、武器を帯びたり、婦人と交接したりはしない。彼らにとって、上記ふたつの営みは 22 歳を過ぎてから行なうものなのだ。彼らは皆気分がよさそうで、これまでに目撃した黒人以上に黒い膚であり、より信義を重んずる心が強く、他の連中がそうしていたように犬を連れてたりはしていない。

† Vinhão entre estes Barbaros algũs Mancebos vestidos de esteiras de Tabua, que he traje dos moços nobres, em quanto não trazem Armas, nem se ajũtão com as Molheres, dos quaes exercicios não usaõ senão de xxij. annos por diante. São todos bem dispostos, mais pretos, que os passados, & mais verdadeiros, & não trazem Caens em sua companhia como elles. †

夜もまだ明けやらぬ午前 2 時、当地の王の息子でイニャンゼと名乗る黒人が父の名代としてカピタン・モールを訪ねてきた。贈り物としてウシ 1 頭を携え、幾人もの従者を整然と従えていた。イニャンゼは次のように述べた。この野営から少しばかり離れた村に私の父、すなわち当地の王がおりますが、父は貴殿来着の報せを得、大いに喜んでます。ところがもう遅うございますし、貴殿が道中の疲れを癒しておられるであろう刻限と考え、父みずからお目にかかるべくただちに参上することは遠慮しました。しかし翌朝、父は必ず参ると申しています。と。ヌーノ・ヴェーリオ・ペレイラは感謝の言葉を尽くして彼に應對した。そして手のひらくらいの大きさの銅のかげらひとつと、大きな釘 1 本を彼に持たせてやると、イニャンゼは大いに満足して戻っていった。

⁶³ 原綴り “Ameixoeira”. 「これは私の間違いでなければソルガム(もろこし)である。この *ameixoeira* あるいは *mexoeira* という語彙は今日〔引用者注——1914 年〕ロウレンソ・マルケスにおいて small grey kaffir corn を指す。年代記作家たちは上記の呼称を現地の言葉と見なしているようだが、それは私の信ずるところ誤りだ」(‘It is, if I am not mistaken, the Sorghum. The word *ameixoeira*, or *mexoeira*, nowadays designates the small grey kaffir corn in Lourenço Marques. The chroniclers seem to consider these names as indigenous, which I believe is a mistake’. H. A. Junod, “The condition of the natives in South-East Africa in the sixteenth century, according to the early Portuguese documents” in *The South African Journal of Science*, February, 1914, p.20. Apud *The Tragic History of the Sea*, ed. C. R. Boxer, p.82, note 2)。

† Sendo ja duas horas de noute veo visitar ao Capitão Mór hum Negro chamado Inhanze filho do Rey daquela terra da parte de seu Pay, com hũa Vaca de presente, & hũa embaixada muy concertada, dizendo, que estando o Rey em hũa sua Aldea, hum pouco apartada daquela stança, soubera da sua chegada, com que se alegrara muito, & por ser tarde, & tempo de elle descançar do trabalho do caminho, o não vinha logo ver, mas que o faria pella menhã. Respõdeolhe Nuno Velho Pereira com palavras agradecidas, & dandolhe hum pedaço de Cobre do tamanho de hũa Mão, /fol.85/ & hum prégo grande, se foy Inhanze muy contente.

【5月9日・10日】ヌーノ・ヴェーリヨには次のように思われた。すなわち、我らが道中の疲労から立ち直り、かつこれ以後の道中へ向かって弾みをつけるためには、そしてウシをなるべく多く買い入れるためには、これまで野営してきた谷間でさらに2日間休息するのが適切であろう、と。そのことが周辺の黒人に知れ渡ると、彼らは物々交換の材料としてまるでアルピステ[カナリアサード]のような穀物を持ってきた。これを彼らはネチニン⁶⁴と呼ぶ。彼らはこの穀物を粉に挽いて食用とする。そのほか彼らが持参したものはゴマ、トウモロコシ、牛乳、バター、ニワトリ、ヒツジであった。いずれもたっぷりと手に入れたのでウシは殺さずに済んだ。奴隷に食べさせても余剰が出るほどの食糧を確保できたので、我らの仲間ですらこれ以上何か買いたいと思う者はいなかった。さらにこの2日間で、ほとんどただ同然の銅と引き換えにウシを24頭手に入れた。無住の土地を抜けた後に余ったウシは12頭であったから、合計は36頭となった。

ix. x. [9 de Maio; 10 de Maio]

Pareceo á Nuno Velho, que pera se refazerem os Nossos do cansasso do caminho, & alentaresem pera o seguinte, & pera comprarem muitas Vacas, seria acertado descansarem dous dias no Valle em que estavam alojados. O que sabido pellos Negros circumvezinhos trouxerão á resgatar hũa semente como Alpiste chamada delles Nechinim, de que fazem farinha, & Gergelim, Milho, Leite, Manteiga, Galinhas, & Carneiros. E tanto de tudo, que se não matarão Vacas, & disto sobejou aos escravos, não havendo ja no Arrayal quem quisesse comprar cousa algũa, trocarão mais por pouco preço de Cobre nestes dous dias vinte & quatro Vacas, que com doze que sobejarão aos Nossos do despovoado, erão por todas trinta & seis. †

11時、当地の王がやってきた。彼の名をマボンボルカツペーロという。アザガイア[手槍]を手にしたおよそ50人の黒人がこれに従っていた。王は母親を連れていた。カピタン・モールは、王と母親をしかるべき礼儀でもって迎え、3名一緒に絨毯の上に腰を下ろした。カフル人たちは我らを見て驚きの様子を隠さず、王は我らの難船と放浪の模様について詳しく知りたがった。このことをヌーノ・ヴェーリヨ・ペレイラが物語ると、黒人の王とその配下は大きな驚きを示した。さらにヌーノ・ヴェーリヨは王に向かって次のように附言した。私は御領地に辿り着くずっと以前から貴殿の名声を聞き及んでいた。その名声ゆえに、私は御領地を経巡り前進することを余儀なくされたのだ。それは貴殿に逢いたいという一念からであった、と。するとこの蛮人はまんざらでもないという表情を見せ、家来どもも王へ次のように進言した。王様、この客人はぜひとも手厚くもてなし、案内にも万全を期してやるがよろしいでしょう。かくも遠くから王様を慕いやってきた者どもではございませぬか、と。王はこの進言をもっともと考え、ガイドであれ何であれ、みずからの村々にあるものなら、すべて提供してあげようと約束した。ヌーノ・ヴェーリヨは

⁶⁴ 原綴り“Nechinim”。「疑いもなくこれは現在もカフル人が利用するトウモロコシもしくはモロコシである」(‘No doubt this is the actual Kaffir corn or millet’. H. A. Junod, “The condition of the natives in South-East Africa in the sixteenth century”, p.20. Apud *The Tragic History of the Sea*, ed. C. R. Boxer, p.151. note 2)。この語彙の起源については、コンカニ語の“nātçunó”であるとされるダルガードの説がある(cf. S. R. Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, II, 87)。

これに感謝し、王の首の廻りに絹糸に結びつけたサンゴの枝をひとつ掛けてやり、さらに大鍋の蓋を 1 個進呈した。母親には緑の彩色を施した水晶の数珠を与えた。そうこうするうちに午餐の時間となったので、わが同胞たちは王と食事をともにし、3 時頃、王と母親はお付きの連中を率いて帰っていった。ピロットはこの滞留地の思い出をより脳裡に焼きつけるためにも、同地で緯度の計測を行なったところ、29 度 45 分と判明した。前回と緯度にほとんど変わりがないのは、とりもなおさず我らが東北東および東に向かって前進したことのあかしであった。

† Sendo onze horas veio o Rey da terra, chamado Mabomborucassobelo acompanhado de algũs cincoenta Negros com Azagayas, & consigo tra/ fol.86/zia sua Mãe. Recebeos⁶⁵ o Capitão Mór cõ a cortesia devida, assentandosse todos tres em hũa Alcatifa. Admirarõsse os Cafres da vista dos Nossos, & quiz o Rey saber particularmente do seu Naufragio, & peregrinação, que referido por Nuno Velho Pereira mostrou o Negro, & os seus grande espanto, apos que seguio Nuno Velho, que por fama soubera delle muito antes de chegar ás suas terras, a qual o obrigara fazer o caminho por ellas pera o ver. Ficou o Barbaro muy vão, & dizendolhe os seus que seria bem, que fossem os Nossos delle bem agasalhados, & guiados, pois de tão longe o vinhão buscar, elle o aprovou, & prometeo dar Guias, & tudo o mais, que nas suas Aldeas ouvesse. Agradeceoo Nuno Velho deitandolhe ao pescoço hũa perna de Coral atada em hũ fio de Seda, & dandolhe hũ tampaõ de Caldeiraõ, & á Mãe hũas contas de Cristal goarnecidas de verde, & sendo horas de jantar comerão com elle, & ás tres horas se forão com toda a sua companhia. So/ fol.87/lenizou tambem o Piloto esta estança, com observar nella a Altura do Polo, & achou ser de vinte & nove Graos, & corenta & cinco Minutos, & haver tão pouca differença da altura passada, foy a causa caminharem á Lesnordeste, & á Leste.

【5月11日】この谷にはミゼリコルディア[慈悲]という名前がつけられた(この谷には奴隷が4人取り残された。その内訳はカフル人がふたり、ジャパン[日本]人がひとり⁶⁶、それにジャオ[ジャワ]人がひとりである)。ミゼリコルデ

⁶⁵ 初版本の表記はこのとおり現在形+直接目的格であるが、コンテキストに鑑みれば完了過去形+直接目的格のほうが自然か。もしそうなら“Recebeos”となる。

⁶⁶ ポルトガル人によって日本の内外で拉致されたか購入されたかした日本人奴隷(“hum Iapão”とあるから男性である)がひとり、東南アフリカの僻地に置き捨てにされた、というこの記事は、ショッキングではあるが、16世紀末から17世紀初めにかけてポルトガル人が盛んに行なった日本人奴隷輸出の史実に思いを致せば、いささかも奇異ではあるまい。

1587年、豊臣秀吉は島津氏を降伏させて九州平定を実現すると、博多に軍を返し、7月24日夜半(陽曆)、イエズス会準管区長ガスパール・コエーリョのもとへ突如使者を送り、商売のため渡来するポルトガル人らが「多数の日本人を購入し、彼らからその祖国、両親、子供、友人を剥奪し、奴隷として彼らの諸国へ連行して」ゆくのはなぜか、という詰問を浴びせた。さらに秀吉はコエーリョに対し、「現在までにインド、その他遠隔の地に売られて行ったすべての日本人をふたたび日本に連れ戻すよう取り計らうことを厳命し、現実的にそれがもし不可能であるなら、「少なくとも現在ポルトガル人らが購入している人々を放免せよ。予はそれに費やした銀子を支払うであろう」と伝えた。コエーリョは、自分たちパードレが奴隷売買を廃止させるためどれほどの労苦を払ってきたかを強調したうえ、最も肝要なのは、「外国船が貿易のために来航する港の殿たちが、厳重にそれを禁止」することだ、と附言した(P. Luis Fróis, S. J., *Historia de Japam*, IV, ed. José Wicki, S. J., Biblioteca Nacional de Lisboa, 1983, pp.402; 403. 『フロイス 日本史 1』豊臣秀吉篇 I, 松田毅一/川崎桃太訳, 中央公論社, 1977年, 322: 324~325頁)。

このときの秀吉の言い分を代弁する『九州御動座記』によると、南蛮人たちが「日本仁を数百、男女によらず、黒舟[引用者——ポルトガル船]へ買い取り、手足に鉄のくさりを付け、舟底へ追い入られるそのありさまは、「地獄の苛責にもすぐれ」たものであり、その様子を見た九州の日本人は、「何れもその姿を学び、子を売り、親を売り、妻女を売」るようになってしまったという。伴天連[イエズス会パードレ]は、日本人が人を売るからポルトガル船が買うのだということを強調し、秀吉は、伴天連やポルトガ

イアという命名であるが、それはデウスが一行に垂れ給うた慈悲の深さにちなむ。荒野を踏破すること14日の果て、デウスは一行をカブラリーアの地で最も裕福にして豊饒な土地へ導き給うたのである。わが一行は5月11日、ガイドと一緒にこの谷を出発した。ガイドたちであるが、王は約束どおり、ヌーノ・ヴェーリョへ出発当日の朝、暇乞いに際して差し出してくれたのである。ヌーノ・ヴェーリョは王の首に、銀製の水差しの蓋を白絹の糸に結びつけて掛けてやった。他のふたりの黒人へは銅のかげらふたつと、釘2本を与えた。

xj. [11 de Maio]

Deste Valle (onde ficarão quatro escravos, dous Cafres, hum Iapão, & hum lao) á que os Nossos poserão nome da Misericordia (pella grande que com elles usou Deos Nosso Senhor trazendoos depois de atravessarem quatorze dias hũ deserto, á mais fertil, & abundante terra da Cafraria) partirão aos onze de Mayo com Guias, que o Rey como prometera, deu a Nuno Velho aquella menhaã despedindosse d'elle, levando ao pescoço hũa cobertoura de hũa Gorgoleta de Prata, presa de hum fio de Seda branca, & ós⁶⁷ dous Negros dous pedaços de Cobre, & dous prégos. †

道は北東へ向かっていた。道中で一度丘に登った。その下り道は石だらけであった。谷には部落が3つあった。これらの部落を通過した後、ひきつづき河を渉り丘に上ったが、そこでウシを2頭仕入れた。午後遅くなってから別の丘に上り、棘の多い雑木林の中、丘を下ってゆくと、北東から延びてくる山並みにぶつかった。その山並みがこの丘につらなっていた。山並みの中で夜のとばりが下り、漆黒の闇となった。したがって水のある低地へは行けず、それなしで野営せざるを得なかった。

† Hia o caminho ao Nordeste, & por elle /fol.88/ sobirão hum alto, cuja decida foy de pedra, & no Valle acharão tres Povoações. Estas passadas, & hum Ribeiro, & hum Monte, onde resgatarão duas Vacas, chegarão ja tarde á outro, o qual decendo⁶⁸ por entre Mato muy espinhoso, toparão hũa Serra, que vinha do Nordeste, & cõ o Monte se juntava. Nella lhes anouteceo com grande escuro, & assi não chegarão ao baixo onde havia Agoa, & alojarão⁶⁹ sem ella.

(この稿、続く)

ル船の奴隷商売を日本人が模倣するのだ、と反論する。ともかくこのとき初めて、ポルトガル人らによる日本人の人身売買が深刻な外交問題として論ぜられたわけである。いずれの側の言い分に理があるにせよ、現実には、九州の領主たちや伴天連と結託した黒船が、日本から数多くの男女を買い取っては、海外に積み出していたのは、紛れもない事実であった(藤木久志『雑兵たちの戦場——中世の傭兵と奴隷狩り』朝日新聞社、1995年、39～41頁)。

日欧交渉史の大先達岡本良知は大著『十六世紀日欧交通史の研究』において、日本人の海外流出を裏づけるかずかずの史実を、ポルトガル側史料にもとづいて早くに明らかにしている(原書房、ユーラシア叢書3、1974年、728～778頁。復刻原本：六甲書房、1942年刊)。たとえば、日葡交渉が始まってまもない1555年11月(弘治元年10月末)、マカオ発、パードレ・バルシオール・カルネイロの書翰によると、多くの日本人がポルトガル商人の手でマカオに輸入されている、彼らはこの奴隷貿易によって多大の利益を上げており、その主たる狙いは女奴隷の獲得にあった、という。ポルトガル人の対日貿易のごく初期の段階から、奴隷は東南アジア向けの主力商品であった(同上書、730～731頁)。

⁶⁷ 海賊版には“aos”とある。おそらくこれのほうが正しいであろう。

⁶⁸ 初版本にも海賊版にもこのとおり直接目的格の“o”が記されるが、“outro (Valle)”を先行詞とする関係代名詞“o qual”を受けているので“decendo”でよい可能性が高い。

⁶⁹ 海賊版には“alojarão”とあり再帰代名詞が用いられていない。